
仮面ライダークウガ×真・恋姫無双 異世界への冒険

sabu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダークウガ×真・恋姫無双 異世界への冒険

【Nコード】

N5764U

【作者名】

sabu

【あらすじ】

ン・ダグバ・ゼバとの闘いから数年後、もう一つのアークルを手にした時、異世界への冒険が始まる

第一話

ジャン「雄介！コッチ！コッチ！」

雄介「待ってよジャン！」

今、雄介とジャンは長野県九郎ヶ岳から少し離れた山中の横穴にいた。

切り立った崖を登ったその先にある横穴には大きな空間が広がっている。

雄介「ジャン、ここに？」

ジャン「うん、ほらあれだよ」

ジャンが指差した先には壁画があった。

雄介は荷物をおきその壁画に近づく。

ジャンは事前に設置していたライトのスイッチを入れる。

雄介「!?!?……これは」

ライトアップされた壁画に描かれていたもの、それは……

雄介「クウガ………」

クウガ——戦士を表すリントの文字

ここで少し時間を戻す。

あの未確認生命体0号にしてグロンギの頂点に立つ最強の存在——
——ン・ダグバ・ゼバとの死闘から数年後、再び冒険に出た雄介

しばらくして日本に戻った雄介は桜子からある情報を聞かされた。

雄介「クウガのマークが見つかった？」

桜子「うん、ベルトが見つかった遺跡から少し離れた山でクウガのマークが描かれた壁画が見つかったの」

雄介「クウガ………」

桜子「それでね、今ジャンがその調査に行ってくれてるんだけど、なかなか進展しないのよ」

雄介「で、俺に行ってほしいと」

桜子「うん、そう言うこと」

雄介「分かりました！じゃあちよつと行ってきます！」

桜子「行ってらっしゃい、先ずは夏目教授の家に行ってね、実加ちゃんに案内してくれるから」

雄介「はい！」

――

そして今に至る。

ジャン「どうかな？」

雄介「うーん、特に何も……………」

そう言いクウガのマークをなぞる雄介、するとクウガのマークが光を放ち出した。

雄介「!？」

ジャン「雄介! 危ない!!」

雄介「うわ!？」

ジャン「く！」

クウガのマークが光ったかと思うと突然壁画が崩れ落ちた。

雄介は巻き込まれそうになるもなんとか脱出する。

雄介「けほっ！けほっ！」

ジャン「ゴホッ！ゴホッ！」

壁画が崩れ落ちたことで土煙が起こり咳き込む。

雄介「大丈夫ジャン？」

ジャン「うん、大丈夫、雄介は？」

雄介「俺も大丈夫、でもいったい何が……」

土煙が晴れるの待ち壁画が崩れた先を見る、暗くてよく見えないが空間が広がっているようだ。

設置していたライトは巻き込まれて使えそうにないので手持ちのライトを使い奥の空間に入る。

雄介「結構広いな」

ジャン「壁画の感じとこの空間……いや部屋と呼ぶべきかな、何かを封印していた……?」

雄介「封印……?」

ジャン「うん……はっ!? 雄介! あれ!」

雄介「あれは!?!」

雄介とジャンの視線の先には台の様なものがあつた、そしてそこには……

雄介「クウガのベルト……………」

かつてリントがグロンギとの闘いにおいて唯一の対抗手段、戦士クウガになるためのアイテム——アークル、それがあった。

雄介「何でベルトが？」

先の闘いで雄介が使ったベルトはダグバとの闘いで破壊された。

壊れたはずのベルトがあることに不思議に思う。

そして確かめる為にアークルに触れた瞬間先程の壁画で同じ様にアークルが光出した。

雄介「また！？くっ！！」

先程の光よりも強い光に目をつむる。

雄介（な…何なんだこれは……………くっ！意識が！！）

光が部屋を満たすと、突然意識が遠のいていき、完全にシャットアウトした。

ジャン「くっ！……………雄……………介？……………雄介！？……………雄介ええええ！！！」

光が収まった後、そこにはジャンだけがいて雄介の姿はどこにも無かった。

第二話

雄介「ん……ここ……は」

目を覚ました雄介は状況を確認するために起き上がる。

雄介「あれ？どこだここ？」

雄介がいた場所は見慣れない造りの部屋で雄介は寝台で寝ていた。

雄介「ジャンが運んでくれたのかな？」

とりあえずジャンを探す為に部屋を出る。するとそこに一人の男がいた。

男「お！起きたか！」

雄介「って、おやっさん！？なんでここに！？」

その男は喫茶ポレポレのマスターおやっさんこと飾玉三郎そっくりだった。

男「おやっさん？ そんな風に呼ばれたことはないな」

雄介「え？ じゃ…じゃあ人違い？」

男「誰と間違われたか知らんが俺の名前は玄豊だ、お前は？」

雄介「お…俺は五代雄介と言います」

玄豊「五代雄介ね……で、お前なんであんな所で倒れてたんだ？」

雄介「あんな所？」

玄豊「ん？ 覚えて無いか？ お前、森で倒れてたんだぞ」

雄介「森？ えっと…ジャン……他に人は居ませんでしたか？」

玄豊「いや、お前一人だけだが」

雄介「一人?…:(どうゆうことだ?俺だけ?ジャンは?)」

玄豊「そういえば気になってたんだがお前珍しい格好してんな、初めてみる作りだ」

雄介「え?」

雄介は玄豊の言葉で気付いた、自分と玄豊の服装の違いに。

自分はTシャツに、ジャージのズボン

対し玄豊は古代中国の庶民がきるような服

玄豊「お前洛陽の出か?」

雄介「洛…陽?」

玄豊「ああ、洛陽に行きゃあどんな布でも手にはいるって話だからな」

洛陽、その言葉から連想するものは一つ——中国

雄介「げ…玄豊さん、ここって…日本…ですよね」

玄豊「日本？ここは陳留の外れの村だが」

雄介「……………」

玄豊「おい！」

玄豊の話聞いた雄介は何も言わずに外にでる。そして驚愕する。

まるで古代中国を思わせる家屋、行き交う人々

玄豊「おい！どうした急に？」

雄介「玄豊さん……この国は……なんと言うんですか？」

玄豊「国？この国は漢だが」

漢——おそらく中国史で最も有名な時代、男達が己の誇りをかけて
闘う激動の時代

玄豊「どうした？顔色悪いぞ」

雄介「すいません……ちょっと気分が……」

玄豊「……分かった、もう少し休んでろ」

雄介「ありがとう………」

そう言い雄介は部屋に戻っていった。玄豊は歩いていく雄介の背中
を見つめる。

玄豊「……………こりゃ一雨来そうだな」

ふと空を見上げた玄豊はそう呟き自分も家の中に戻った。

今にも雨が降りそうな空は雄介の心情を表すようだった。

第三話

雄介「おやっさん！薪割り終わったよ！」

玄豊「おう、お疲れさん、よし飯にするか」

雄介「分かった！」

雄介がこの世界に来てから数週間、雄介は玄豊の下で生活をしてきた。

く回想く

あの後床についた雄介は自分の置かれている状況を整理していた。

俺はどうなったんだ？あの時ベルトから光が出て……意識が途切れた。

気づいたら玄豊さんに助けられた。

ジャンは？俺だけなのか？

……漢……俺はタイムスリップしたのか？

いやありえない

そうか夢……夢か……

目が覚めたらポレポレで昼寝でもしてるのかな？

そうだ……そうだよな

よし寝ようそうすれば夢も覚める……はず………

翌朝、雄介は目を覚ましたが周りの状況が変わっていないことに落

胆する。

雄介「夢……じゃないのか……」

しばらくの間寝台に座り呆けていると玄豊がやって来た。

玄豊「おい起き……起きてんならさっさと来い」

雄介「あ……はい」

昨日からの急激な状況変化のため精神を磨り減らした雄介、その顔に笑顔は浮かんでいなかった。

玄豊「昨日から何も食ってねえんだから腹減ってるだろ、飯にしよ
うぜ」

雄介「あ………」グウウ

玄豊の言葉で思い出したかの様に腹の虫が鳴る。

思い出せば登山の際に携帯食料を食べて以来何も口にしていなかった。

玄豊に連れられ居間に来た雄介の前に食事が出された。

玄豊「ほら、遠慮せずに食え」

雄介「はい……いただきます」

食事を始めた雄介、しばらくするとだんだんと顔が綻んできた。

絶品の料理とは言えないが温かさを感じる味に自然と気持ちが落ち着いたのだ。

玄豊「やっとなしな顔になったな」

雄介「え？」

玄豊「お前、昨日からずっとしかめっ面だったからな」

雄介「そう……でしたね」

玄豊「……………まあいい、飯食ったらお前のこと話してもらおうぜ」

雄介「っ！……………何を……………ですか？」

玄豊「なめんな、俺は学は無いがよ、馬鹿じゃあねえんだ、お前が何か隠してるかくらい分かんだよ」

玄豊は鋭い眼光で雄介を睨む、がすぐに元の表情に戻る。

玄豊「だがどうしても言いたくなかったら話さなくていい」

雄介「……………いえ、話します」

雄介は玄豊にクウガとグロンギのことを除いた全てを話すことを決めた。

それは玄豊の人となりを感じたから。

一通り話を聞いた玄豊は小さくため息を吐く。

玄豊「ふう……未来ねえ」

雄介「やっぱり……信じられませんか？」

玄豊「いや、信じるさ、お前の目を見てりや嘘ついていないことくらい分かる」

雄介「玄豊さん……ありがとうございます!!」

玄豊「ああ、それはもういいんだが……その『玄豊さん』ってのは止めてくんねえか？さん付けで呼ばれたらむず痒くてしかたねえ」

雄介「あ……はい、じゃあ……おやっさん……って呼んでもいいですか？」

玄豊「ああ、そっちの方がいいな……そういえば最初も俺のことおやっさんって呼んだが、そんなにそっくりなのか？そのおやっさん

ってのは」

雄介「顔はスッゴいそっくりなんだけど……性格は全然違うかな、前のおやっさんはひょうきんな感じだった」

おやっさんと呼ぶようになったためか話し方が大分フランクになった。

玄豊「そんなにそっくりなのか……一度会ってみたいな………おお！忘れとった！」

そう呟くと何かを思い出したように奥の部屋に入っていく、戻って来るときには何かを持って来た。

アークルだ。

雄介「!?!」

玄豊「これお前のだろ？お前が倒れてた所の側に落ちていた」

玄豊が差し出すアークルを雄介は受け取る。

雄介「俺の……です」

玄豊「……………さてと、こうなったらしばらくはここで暮らすことになるな」

雄介「そう……なります」

玄豊「衣食住は気にすんな、家においてやる……ま、それなりに働いてもらうがな……よし、もう少ししたら村の皆に紹介するからそのつもりでな」

雄介「おやっさん……ありがとう」

玄豊「ふんっ、気にすんな」

雄介「うわ!？」

そう言い玄豊は雄介の頭をわしわしとする。

玄豊「ははは♪」

雄介「あはは♪」

その後玄豊から村人に紹介された雄介

元々玄豊は村のまとめ役で皆から信頼されていた。

そんな玄豊からの紹介、さらに雄介自身の明るさもあり直ぐに村人に受け入れられた。

ここで冒頭に戻る。

この村で暮らすようになった雄介は主に玄豊の仕事を手伝っていた。

仕事と言っても薪割りや水汲み、畑仕事、夜間の見回りなどであった。

最初は戸惑うことばかりだったが、世界中を冒険して培った好奇心

や適応力をフルに活かし、徐々に慣れていった。

村の生活にも慣れ、他愛の無い平和な日常を送っていた雄介

しかし、突如その平和は崩れ始めた。

第四話

雄介がこの世界に来てから一ヶ月頃、雄介は村から少し離れた大きなそれなりに栄えた町に仲間と野菜を売りに訪れていた。

龍真^{りゅうしん}「なあ！飯いつ食う？」

仲間その一、龍真、弁当が待ちきれないのか昼食の話をはじめた龍真、食いしん坊でノンキだが勇気があり悪を許さない好青年だ。

雄介「龍真……まだ売り始めたばかりだよ」

狼乾^{ろうけん}「売り切ったら買い出しだ、とりあえず買い出し前に昼にする」

仲間その二、狼乾、目付きが悪く、態度でよく不良に勘違いされることが、人を守る為に怪我也恐れない男である。

歳も近いとあり、雄介はこの二人と一番早く仲良くなった。村では三人でつるんでいるのがいつもの光景になっている。

龍真「よおおし！さっさと売るぞ！！」

雄介「あはは……」

狼乾「はぁ………」

龍真のテンションに苦笑いの雄介に、ため息を吐く狼乾であった。

雄介「いやぁ、全部売れてよかった」

龍真「ほうあな」

狼乾「龍、飲み込んでから話せ」

龍真「モグ……ン、そうだな」

太陽が頂点から少し傾いたころ、雄介達は昼食をとっていた。

ちなみにだが雄介の格好は玄豊から貰った服だ。

それは雄介が最初に着ていた服では目立つためで、ついでに言うとなんセツトだけでは着まわしが出来ないためである。

龍真「ガツガツ…ン、ブ！？くく！？」

雄介「龍真！？」

狼乾「ったく、ほら水だ」

食べ物を喉につまらせ、悶える龍真に水を渡す狼乾

龍真「ゴク、ゴク、ゴク……プハッ、あー死ぬかと思った」

雄介「落ち着いて食べなよ」

狼乾「汚ねえな、鼻が垂れてんぞ」

龍真「あはは♪ごめんごめん」

雄介「ははは♪」

狼乾「ふ……」

龍真が笑うのにつられ雄介も笑いだし、狼乾も小さく笑う。

雄介「じゃあ、そろそろ行こうか」

狼乾「ああ」

龍真「おう」

弁当を食べ終えて買い出しに向かおうとした三人、しばらく町を歩いていると、町の入り口に人が集まっているのに気づく。

雄介「なんだろ」

狼乾「芸人か？」

龍真「見に行こうぜ！」

雄介「ちよつ、龍真!？」

雄介の静止を聞かす走り出した龍真は人ごみの中に紛れていった。

狼乾「あんの馬鹿が」

雄介「まったく」

雄介と狼乾は龍真を連れ戻すために人ごみに入っていた。普通芸人なら歓声が聞こえるのだが、ざわめきしか聞こえないのを不審に思いながら進んで行くと中心に出た。

雄介達が中心に来たとき、そこには芸人はおらず、龍真がしゃがみこんでいた。

雄介「龍真？」

狼乾「龍、どうし…た…」

龍真は背を向けていたので手元を覗き込んだ、そこには血まみれの少年が龍真に抱えられていた。

雄介「そ…う…?…」

狼乾「宋…!?!…」

龍真に抱えられた少年、名は宋、村に住む少年で三人のことを兄と呼び慕っている。

龍真「宋！…宋！しっかりしろ！！」

宋「龍…兄…」

雄介「宋！！」

息も絶え絶えな宋、雄介と龍真は気が気でない様子だ。

狼乾「落ち着け！！」

混乱している二人を一喝して落ち着かせる狼乾

狼乾「宋…何があった？」

宋「狼…兄…村が…村が賊に！っ！？ゴホ！！」

力んだためか吐血してしまう。

龍真「宋!?!」

狼乾「村に…賊だと?」

雄介「そんな……」

狼乾「村の皆は?」

宋「大人が…抵抗してたけど…皆…賊に…俺も…一緒…に…戦ったけど…怪我して…先に…逃がされて…ヒグッ…俺…なんも出来なくて!」

龍真「そうか…辛かったな」

一人だけ逃げたことが悔しいのか泣きながら語尾を強くする宋を龍真は抱きしめる。

しばらく嗚咽が聞こえていたが次第に静かになった。

龍真「宋……宋?……っ!?!?宋!?!」

既に宋は事切れていた。

雄介「くっ!………」

狼乾「宋……………」

雄介は沸き起こる何かを押さえつける様に目を伏せ、狼乾は目の前の事を認めたくないかの様に顔を逸らす。

龍真「……………」

龍真は宋を横にすると無言で立ち上がる。

雄介「…………龍真？」

龍真「雄介…………俺…………俺↓！」

そう言っていると龍真は町の外——村の方向に走り出す。

狼乾「龍↓？」

雄介「…………龍真…………！」

狼乾「雄介↓？」

龍真に連れられてか雄介も走り出した。

狼乾「なんで……なんでなんだ!!」

宋を一人残せないため動けない狼乾、突然の事態に憤りが隠せない。

狼乾「くっ……うっ……うあああああああああああああ!!」

町に狼乾の咆哮が響く。

第五話

村までへの道中、雄介と龍真は息を切らしながら走っていた。

雄介「はっ…はっ…はっ…」

龍真「はっ…はっ…っ!? うわ!」

雄介「龍真!」

地面のくぼみに足を取られ、転んでしまった龍真

龍真「ぐっ! ……だ…大丈夫だ…急ごう…」

雄介「ああ…」

それから三十分ほどして村の入り口が見えてきた。
雄介「っ!」

龍真「そんな…」

村にたどり着いた雄介達は驚愕する。

いつかは軍に仕官する事を夢見ていた青年

気前がよく、世話好きな女性

昔の武勇を自慢していた老人

いつも明るく、走り回っていた少年

その人達が血を流し、倒れていた。

龍真「くっ！……」

龍真はその光景を見て、膝から崩れ落ちてしまう。

雄介「……………」

雄介はこの光景を見てあることを思い出していた。

それは数年前、雄介がある国を訪れた時、テロリストグループの一員の男と言葉を交わす機会があった。

その男は言った。

男「俺達は誇りを持って闘っている！国を変えるために！！」

その言葉を雄介は理解が出来ないでいた。

その誇りある闘いで何故人を殺すのか？

何故一般人を巻き込むのか？

その後暫くの間、雄介はその事で悩んでいた。

そして今、目の前の現状を目の当たりにし、全てではないが、雄介は男の言葉を理解できた。

ここにあるのは、ただ貪ることのみ。

物を奪い、人を切り、女を犯し、ただ快樂を得る。

意義も、意味も、誇りも、何も無い。

ただ……貪ることのみ

龍真「うっ……くっ……！」

雄介「……だ……」

龍真「……雄介……？」

雄介「まだだ！」

龍真「！？」

雄介「まだ生きてる人がいるかもしれない！探そう龍真！！」

龍真「っ！……ああ！」

雄介の言葉に力強く返す龍真、二人は別れて生き残っている人を探し始めた。

雄介「誰か！無事な人はいないのか！！」

それから雄介は倒れている人、一人一人確認し、家の中を見て回った。

しかし、息をしている者は一人もおらず、絶望に落ちそうなのを耐えながら希望を捨てずにいた。

雄介「誰か…誰か!…っ!? おやっさん!」

暫く走っていると見馴れた後ろ姿を見つけた。

玄豊だ、玄豊は剣を持ち、道の真ん中に仁王立ちしていた。

雄介「おやっさん!…おやっさん!…おやっ!」

呼んでも反応が無いため雄介は玄豊の肩に手を置いた。
すると玄豊はゆっくりと倒れた。

雄介「おやっ…さん?」

雄介は何が起こったのか分からなかった。

雄介「おやっさん…おやっさん…おやっさん!」

雄介は玄豊の体を揺する、しかし、玄豊は反応しない。

雄介「おやっさん！おやっさん！おやっさん！！」

いくら声をかけても返事はない。

雄介は気が動転している為か後ろから剣を持った男が近づいているのに気がつかない。

雄介「おやっさん！！」

男「…………ふ！」

男が剣を振り上げた瞬間、雄叫びが聞こえた。

龍真「うおおおお！！」

男「ぐ！？」

雄介「！？」

龍真は雄介に剣を振り下ろそうとしている男を見つけ、男にタック

ルをした、二人はもみくちゃになりながら転がっていた。

雄介「龍真!?!」

龍真「雄介!!」

龍真は立ち上がり雄介に向き直る。
しかし……………

男「クソが!」

龍真「が!?!」

男は思考が早かったらしく、龍真の胸に小刀を突き刺していた。

龍真「ぐ!…:があああああ!!」

男「がは!?!」

龍真は痛みには耐えながらも、力を振り絞り、男を突き飛ばすが、その場に倒れる。

雄介「龍真!！」

龍真「雄…介…」

雄介「しっかりしろ!!」

龍真「雄介…俺…死にたく…ねえよお…」

痛みと死への恐怖からか泣き出した龍真

雄介「大丈夫だ!助かるから!！」

龍真「雄介…ごめん…」

雄介「何が…何がだよ!！」

龍真「俺…俺…」

雄介「…龍真?…龍真!?!…龍真!！」

ついに龍真から反応が無くなった。

雄介「龍真!!」

男「ちっ! ふざけやがって」

雄介「…………お前」

男は立ち上がり、ゆっくりと近づいてきた。

男「はっ、死んだか、いい気味だ……お前も死んどけ」

そう言う男は再び剣を振り上げ、雄介に振り下ろした。

雄介「く!」

雄介は剣を避けるために護身用に持っていた剣を抜いた。

しかし、受け止めた角度が悪かった為か、剣は滑り、男に向かった。

雄介「え———?」

吹き上がる血飛沫

赤く染まる視界

崩れ落ちた男

雄介「俺……………」

目に入る玄豊と龍真

雄介「俺……………」

思い出す誰かの笑顔を守るという誓い

音を立て、壊れた雄介の中の何か

雄介「俺

人を

殺した

」

第六話

時間は少しさかのぼり、雄介と龍真が生存者の搜索を始めた頃、雄介達が通った道を十人くらいの人が馬を走らせていた。

先頭を走るのは日に照らされ輝く銀髪の少女、曹操に仕える武将の一人、楽進だ。

この日、楽進は曹操の支配する領内の町を視察するために訪れていた。

そして住民から知らされた村への賊の襲撃、楽進は視察を中止し、部下を引き連れ村へと向かった。

今私は部下を引き連れ町の外れの村が賊の襲撃にあったとの情報を入手し、件の村に向かっている。

暫く走り、村が見えるところまで来たところたん馬が突然暴れだし、振り落とされそうになった。

楽進「ぐ！？何だ！どうした！」

よく見ると部下が乗っている馬も全て興奮して……いや怯えている？ 一体何に？

と思っていると……

楽進「……！！？」

感じたのは殺気、そして恐怖

私はまるで体に刺さるか刺さらないかギリギリに大量の槍を突き立てられているかの様な錯覚に陥り、村の方から感じる禍々しい気に当てられ体が動かなくなつた。

少し経つとその禍々しい気は徐々に薄れていった。

「楽進様…… 一体今のは」

部下達も皆顔が青ざめていた。

楽進「……分からない……止まっても仕方ない！馬は使い物にならないから置いて村に急ぐぞ！！」

「」「応！！」

私達は馬を降り、先を急いだ。

――

ここは村から離れた森の中

雄介はそこを歩いていた。

雄介「……………」

無言で歩く雄介、その目には全く生気が感じられず、体からは異様な気を放っていた。

雄介「……………！」

うつむいて歩いていたためか、目の前の木に気付かずぶつかってしまった。

私が再び気を感じたのは部下が生存者の搜索のために散開した時だった。

震える体を無理矢理動かしてその気を感じた方向に向かう。

近づく度に強くなる恐怖心から歩みが止まりそうになるがもようやく気の正体を見つけた。

それは一人の青年だった。青年は叫びながら木を殴っていた。

その光景はまさに狂気

しかし、どこか自分の思い通りにならない子供のダダのようにも思えた。

それでも青年から放たれる気により私はその場に棒立ちになっていた。

暫く私が立ち止まっていると後ろから気配を感じた。
部下の誰かかと思って振り返ったが違った。

誰かがいた。

何者か分からないが誰かがいた。

金色の角と赤い大きな目の仮面

赤い鎧に黒の服

そして感じる暖かな気

私は恐怖を感じた訳ではないのにも関わらずその姿に圧倒された。

その者は私と目が合うと静かに頷き青年に近づいていった。青年はその者に気づいたのか振り返り、見えた青年の目は暗く、闇夜のようだった。

青年はその者を目に捉えるとまるで幽霊をみたかのような表情になって、石のように固まった。

その者は青年を慰めるかの様に抱きしめた。

すると青年は突如声を出し泣き出した。

暫くすると青年からは寝息が聞こえてきて、その者は青年を横にした。

その者は立ち上がると何かを伝えるように私の目を見詰め、どこかへと立ち去った。

気付いた時には青年からの気も感じなくなり、仮面の者からの気も途絶えていた。

私は部下が私を探しにくるまでその場に立ち尽くしていた。

第七話

雄介「……………」

朝、日が昇る前の暗い頃、雄介は目を覚ましていた。

雄介「あれは……なんだったんだ」

思い出すのは昨日の出来事

雄介はあの男を殺したあと暫くの間思考を止めていた。
気づけば森の中を歩いて、少し意識が戻っていた。

そして自分についていた血を認識してから、また思考が止まった。

雄介「クウ……ガ」

そして見た

自分のもう一つの姿

古代の超戦士

クウガ

雄介「そうだ…ベルト」

雄介はもう一人のクウガの正体が気になりもしやと思いアークルを確認した。

雄介「ある……夢だったのか……？」

雄介は自分を抱きしめたクウガを幻覚、もしくは夢だと思うことにした。

雄介「……………朝か……………」

部屋が明るくなり、ふと外を見ると既に日が昇っていた。

これからどうしようかと考えていると突然吐き気をもよおした。

雄介「うゝ！？……んゝんゝ……っ！はっ…はっ…」

思い出したのだ恩人と親友の死を、自分が殺した男のことを。

吐き出す訳にはいけないので無理矢理飲み込むが、口の中に気持ちの悪い酸味が広がる。

口をゆすぐうと思ひ、台所に向かおうとしてふと思ひ出す。

雄介「あれ？……いつの間に家に？」

記憶が残っているのは森いるところまでだ、いつの間に戻ったのだろうと考えながらうがいをしていると、こちらもいつの間に村に戻ったのか狼乾がやって来た。

狼乾「…………雄介」

雄介「…………狼乾」

どこか気まずい空気が流れる。先に口を開いたのは狼乾だった。

狼乾「……お前だけでも無事でよかった」

雄介「うん」

狼乾「……教えてくれ、あいつの……龍真の最期を」

雄介「……うん」

雄介は龍真の事について話した。

雄介が話終えた時、狼乾は静かに涙を一滴流し、隠す様に顔を逸らす。

雄介「狼乾……」

狼乾「大丈夫だ……そろそろ行くぞ楽進様が待っている」

雄介「うん……って楽進様？」

聞いたことの無い名前が出たことに首を傾げる雄介

狼乾「ん？曹操様の家臣の方だ、最初に会ったと聞いたが？」

雄介「えっと……ちよつと……分からない」

狼乾「？……まあいい、行くぞ」

雄介「う……うん」

雄介はよく分からないまま狼乾に連れられ家の外に出た。

外に出ると楽進が兵士と話していて雄介達に気づくと会話を切り上げて雄介達に向き直る。

狼乾「楽進様、雄介を連れて来ました」

楽進「ああ…五代と言ったか？大丈夫そうだな」

雄介「は…はい、えっと…」

楽進「あの時は気づいてなかったか……楽進だ」

雄介「自分は五代雄介と言います」

少し口調が変わった雄介、これは玄豊に軍人等には話し方をしっか

りした方が良いと言われてたためだ。

楽進 「ところで五代、一つ尋ねたいのだが」

雄介 「何でしょうか？」

楽進 「あの仮面の者は何者だ？」

雄介 「仮面の……っ！……もしかしてこんなのでしたか？」

雄介は地面に簡単にクウガの絵を描く。

楽進 「ああ、確かにこいつだ……こいつは何者だ」

雄介 「これは……クウガ……です」

楽進 「クウガ？」

狼乾 「……？」

口を挟まないように傍にいた狼乾も首を傾げる。

雄介 「本当にいたのか………」

楽進 「何か言ったか？」

雄介「いっ…いえ、何も…」

楽進「そうか…この者に会った時、とてつもない気を感じた……しかし暖かく、包まれる様な気だった」

雄介「……はい、彼は…クウガは、奴らから皆の笑顔を守る為の存在ですから」

楽進「そうか…奴ら？」

雄介「え？…あつ！えっと…その……」

つい口を滑らせた雄介、クウガの事を話してもグロンギについて話すつもりはなかった。

楽進「賊のことか？」

雄介「はっ…はい！」

いい感じに勘違いをしてくれた楽進に雄介は安堵した。

暫くすると兵士が近づいて来て……

兵士「失礼します！夏侯淵將軍が到着しました！」

やって来たのは夏侯淵、賊の討伐のためには現存の兵では足りないので援軍を呼んでいたのだ。

と言っても来たのは先遣隊で本隊が来るにはもう少しかかる。

楽進「分かった、すぐに合流する」

兵士「は！」

楽進「私達はこれから賊の討伐に向かう、お前達はここで待機していろ」

雄狼「はい」

楽進はそう言い残し、村の外に向かう。

楽進を見送った後、狼乾が口を開く。

狼乾「…………雄介」

雄介「…………何？」

狼乾「俺…………軍に志望する」

雄介「…………うん」

狼乾「…………一緒に入らないか？」

雄介「…………ごめん」

狼乾「……………そうか」

雄介「……………」

狼乾「……………」

狼乾「墓参り……………行くか？」

雄介「……………うん」

その後、二人は村民の墓に行き黙禱を捧げると声も殺さずに泣いた。

第八話

雄介「ふう……」

陳留の城、雄介は厨房で食器を洗っていた。

楽進達が賊の討伐を終えた後、狼乾は軍に志願するということ伝えて、夏侯淵と楽進はそれを承諾した。

その際、雄介も軍に入るのかと聞かれたが、雄介は入るつもりは無いと言い、話し合った結果、城に下男として仕えることになった。

「雄介、終わった？」

雄介「はい、光翔さん」

雄介に話しかけてきたのはこの厨房の料理長、光翔雄介こうしょうがこの城に来て最初に打ち解けた人物だ。

城に来て仕事を割り当てられようとした時に厨房の人手が足りないと、口を挟む間もなく引っ張られ、仕事をしている内に打ち解けることが出来た。

光翔「うん、じゃあ休憩していいよ」

雄介「ありがとうございます」

光翔から休憩を許されたので前掛けをとり一息つく雄介

すると楽進がやって来た。

楽進「すまない、水をくれ」

訓練終わりの楽進、喉を潤すために来たのだ。

雄介「はい、分かりました」

目が合った雄介は湯呑に水をくみ差し出す。

雄介「どうぞ」

楽進「ああ」

楽進は笑顔の雄介を見て顔に影が差す。

未だに迷っているのだ、雄介を下男とはいえ陣営に入れたことを…
：

あの時クウガと遭遇したことですっかり頭から抜けていたが、最初に感じた禍々しい気は確かに雄介から発せられていた。

楽進は自惚れる訳では無いが自分の武には自信がある、事実、そんなじよそこらの兵などには足下にも及ばない。曹操の下についてそれなりに場数も踏んだ。

そんな自分を臆させる程の気を放つ雄介が今、目の前で屈託の無い笑顔を浮かべている事が不気味でしやうがなかった。

雄介「どうかしましたか？」

楽進「いや、何でもない」

楽進は適当に流し、食堂を出ていった。

第九話

典韋「こんにちは」

光翔「これは典韋様」

厨房にやって来たのは典韋、料理が好きな彼女はよく厨房に来るため二人は世間話をする程度に仲が良い。

典韋「料理をしたいので野菜を貰ってもいいですか？」

光翔「はい、構いませんよ」

光翔は農家出身で、野菜作りの腕は主の曹操も認めているため厨房の裏手に畑を作るのを許されていた。

典韋も料理を作る際には光翔の野菜を使っているのだが、それでもいちいち許可を求めるのは彼女の性格故だろう。

光翔「雄介、お供しなさい」

雄介「はい」

いくら勝手を知った仲でも將軍を一人で野菜の収穫に向かわせる訳

にはいかないので光翔のは雄介をお供につけさせる。

典章「お願いしますね、えっと……」

雄介「五代雄介と申します」

典章「ではお願いしますね、五代さん」

雄介「はい」

その後、典章の指示で雄介は野菜を収穫して厨房に戻った典章は料理を始めた。

しばらくして出来たのは簡単な野菜炒め、それでも典章の腕にかかれば高級店以上の味になる。

料理が出来上がった頃合いに曹操がやって来た。
どうやら約束をしていたらしい。

曹操「流琉」

典章「あ、華林様、ちょうど出来上がったところです」

曹操「そう、よかったわ」

曹操が席に着いたので典章は料理を運ぶ。

雄介は手持ち無沙汰だったので後片付けを始めた。

曹操「流石流琉ね、美味しいわ」

典韋「ありがとうございます♪」

曹操に誉められ典韋はとても嬉しそうだ。

雄介（やっぱりいいな、こうゆうの）

笑顔がある食卓というのが同席している訳でも無いのに嬉しく思う雄介だった。

典韋が皿を戻しに厨房に行った後、笑顔をこぼしながら後片付けをする雄介を曹操は茶を飲みながら見ていた。

実は曹操は一使用人である雄介の事を知っていた。

それは雄介が城に来て、数日経った頃、楽進は顔をしかめながら廊下を歩いていた。

そこに通りかかった曹操が声をかける。

曹操「風……どうかしたの？」

楽進「華林様……」

曹操「そんな風にしてたらかわいい顔が台無しよ」

楽進「えっ！？ちょっ！そんな……！」

曹操「ふふ♪」

かわいいと言われ、慌てふためく楽進を楽しむ曹操であった。

曹操「で…本当にどうしたの？」

楽進「えっと…実は…その…気になる者がいまして……」

曹操「気になる者？」

楽進「はい……先日……っ!？」

話そうとして何かを見つけ、驚いたように目を見開く楽進

曹操がその視線を追うとそこには荷物を運んでいる雄介がいた。

曹操「男……?…風？」

楽進「はっ…はい、あの者は先日賊に襲撃された村の生存者で、城に使用人として使えている者です」

曹操「へえ……それにしても風がねえ……」

曹操は楽進がどんな感情であれ男に興味を持つ事が意外であった。

そして楽進に興味を持たせる雄介にも曹操は興味が沸いた。

それから曹操は雄介の事を調べ始め今に至る。

片付けを粗方終えた雄介に光翔が声をかける。

光翔「雄介、ちょっと仕入れについて商人と話して来るから」

雄介「あ、はい」

そして典韋も兵士が調練について相談があると呼び出され食堂を出ていった。

この場に残された雄介と曹操、物音が異様に響く。

しばらく沈黙が続いているとふいに曹操が雄介に声をかける。

曹操「その」

雄介「なんでしょうか？」

曹操「…………お前、茶は入れられるかしら？」

雄介「は…はい」

曹操「そう、じゃあ用意しなさい」

雄介「はい、分かりました」

曹操に指示された雄介は茶の用意をする。

しばらくして入れた茶を出す雄介

曹操は差し出された茶を一口飲む。

この時点で曹操は顔には出さないが二つの事に驚いていた。

一つ目は雄介が普通に対応したこと

曹操は雄介に話しかけて際に微量だが覇気を織り混ぜていた。

だと言うのに雄介は何でもないと言うように対応した。

これはダグバや他のグロンギとの闘いでえた耐性である。

二つ目は雄介が調理仕事が多いとはいえ庶民の出（という事になっている）の者が茶を入れ、尚且つ曹操が美味しいと思える程の味を出したこと。

これについては旅で中国を訪れた際に先祖代々茶葉を作る一族に茶の入れ方を習ったためだ。

茶を飲み干した曹操はしばらく考えた後、お代わりを要求する。

曹操「……もう一杯いただこうかしら」

雄介「はい」

曹操「あと……」

雄介「……？」

曹操「お前の分も入れなさい」

雄介「……はい」

曹操と自分の分を用意した雄介は曹操に茶を出したがどうしようかと悩んでいると、曹操が自分の前に座るように促す。

雄介「…………」

曹操「…………」

机を挟んで対峙する雄介と曹操

再び沈黙が生まれる。

しばらく無言で茶を飲んでいると不意に目が合う。

雄介「…………」

曹操「…………」

雄介は特に何も思わず見詰めるが、曹操は雄介の心を探る様に見詰める。

最初に感じたのは暖かさ、次に強さ、雄介の心を感じていると一瞬、刹那と呼べる程だが何時間も見続けた様に頭に残るものがあった。

色々な思いの中に感じた、闇より暗い何か

頬を一筋の汗が流れる。

喉が渴く。

残り少ない茶を飲み干し曹操は静かに席を立つ。

曹操「……………美味しかったわ、ありがとう」

雄介「あ……………はい」

そう言い残し曹操は出ていった。

雄介「……………」

後には首を傾げる雄介が残された。

第十話

雄介「曹操様、お茶が入りました」

曹操「ありがとう」

政務をしている曹操に茶を差し出す雄介

食堂での一件以来、曹操は雄介の入れる茶が気に入ったようで、自分の茶を入れる係にしたのだ。

雄介「では失礼します」

茶を出した雄介はいても邪魔なだけなのでさっさと部屋を出る。

雄介「おっと！？すみません！！」

「…………ちっ」

部屋から出た際にフードを被った少女とぶつかりそうになる。

彼女の名は荀イク、曹操に仕える軍師なのだが男嫌いなうえ同性愛者、しかも意中の相手は曹操とあり、その曹操から気に留められている雄介のことが気に入らないらず、嫌っている。

舌打ちをした荀イクは雄介を汚物を見るような目で一瞥して政務室に入る。

流石の雄介もこれにはへこむ、へこみはしても嫌いになったりはしない、これもまた雄介の性格故だろう。

軽くため息を吐きながら雄介は厨房に戻る、荀イクとの関係をどうにかしたい、最近の雄介はそればかり考えていた、やはり嫌われるということは良くないし嫌だ、しかし実際は軍人、しかも幹部クラスと一使用人、正直どうしようもない。

さらにもう一人、荀イクとは別にどうにかしたい人物がいた。ちやうど廊下の向こうからその人物が歩いて来た、楽進だ。

目が合うと楽進は体を少し強張らせる、雄介は立ち止まり会釈する。楽進が通り過ぎるのを待って雄介は歩き出す。

そして再びため息を吐く。

楽進もまた雄介との関係が良好ではなかった。

雄介はどうとも思っていないが楽進は村での一件以来（雄介は覚えていない）苦手意識を持っている。

雄介にとって荀イクよりも楽進の方がたちが悪い、荀イクならば雄介を嫌っている理由がはっきりしているが、楽進は理由が分からないのだ。

三度ため息を吐く、どうも雄介らしくない日々が続いていた。

第十一話

雄介「天の御遣い？」

狼乾「ああ」

庭の掃除をしていた雄介は休憩中の狼乾と話していた。

狼乾「この前の賊の討伐の際に共闘した義勇軍に天の御遣いがいたらしい」

雄介「へえ、そうなんだ」

天の御遣い——噂は雄介も知っていた。

雄介は多少この時代の知識はあったが天の御遣いと呼ばれる者は聞いた事が無いためそれなりに興味があつた。

雄介「どんな人だった？」

狼乾「ん、そうだな……白くて光る着物を着ていたが……遠くからしか見えていないから良く分からなかったな……」

雄介「へえ」

狼乾「お前…へえって、最近様子おかしいぞ」

雄介「え？そう？」

狼乾「そうなんだよこの野郎」

雄介「ちよっ！？ほうへん！？いはいいい！！」

雄介の両頬をムニーっと引っ張る狼乾

雄介「何するんだよ狼乾」

痛む頬を擦りながら文句を言う雄介

狼乾「暗いんだよ」

雄介「え？」

狼乾「てめえで言ったら、自分は2000の技を持つ男って、そんなで一つ目の技が笑顔だって」

雄介「狼乾………うん」

狼乾の言葉に微笑む雄介
そして雄介は自身の代名詞でもあるサムズアップを決める。

雄介「ありがとう」

狼乾「おっ！なんか久々に見たな、何て言ったか……」

雄介「サムズアップだよ」

狼乾「そうそう、さむずあっぷだ」

そして狼乾もサムズアップを決める。
するとどちらとなく笑い始めた。

その後は狼乾は調練に行き、雄介は掃除に戻った。

この日、曹操は予てより捜していた黄巾党首領の張角を見つけ、討伐に向かった、その為城の中は普段よりも人氣が少なかった。

光翔「ふう………」

畑を耕していた手を止めたため息を吐く光翔

雄介「どうかしたんですか？」

一緒に手伝っていた雄介は心配して尋ねる。

光翔「ん〜？ いや、争いって虚しいなって」

雄介「争い…ですか？」

光翔「うん…俺はさ、人が美味そうに俺の料理食べてくれるのが一番嬉しいんだ…でもさ、美味そうに食べてた人がもう食べてくれなくなるんだ、このご時世じゃ」

雄介「……………」

光翔「何で人は争うのかな？正直政治とかは分かんないけど、俺は野菜作ってればそれでいいんだよなあ」

光翔は井戸水で冷やしていたキュウリをとり雄介にも渡す。

カリッ、と音を立てキュウリを食べる。

光翔「うん…どう」

雄介「…美味しいです」

光翔「そっか♪」

雄介「光翔さん」

光翔「なに？」

雄介「俺は昔、っていうほど前じゃないけど悪い奴と闘ってました、皆の笑顔を守るために」

光翔「……………」

光翔は雄介の告白を静かに聞く。

雄介「でも思うんです、結局それは暴力での解決なんだって、相手とは話すこともできたんです、ちゃんと話し会えば闘わずに済んだのかもしれないのに」

光翔「雄介はさ、後悔してる？ 闘ったことを」

雄介「よく……分かりません、闘った後、回りからは誉められました、よくやったって、それにその時はそうするしかなかったから」

光翔「……いいんじゃないかな？」

雄介「え…………？」

光翔「雄介が後悔してなければいいと思う、あ…………ごめん、そんな難しいこと言えないから」

雄介「……………はい！」

光翔「さて、休憩は終わりにしようか、皆が帰ってきて疲れてるだろうから美味しい野菜作らなきゃね」

雄介「はい！頑張りました！」

光翔の言葉に気が晴れた雄介であった。

第十二話

黄巾の乱は首謀者張角、張宝、張梁の死で幕を閉じた。

雄介達は帰ってきた兵士達を出迎える。

しかし、見知った顔がいなかったりして悲痛な表情になるが狼乾を見つめ安堵する。

兵士達が帰ってきたら忙しくなる、怪我をした兵士の治療や事後処理などで慌ただしい。

雄介は政務には関わらないので兵士の治療を手伝う。

雄介「歩けますか？」

「あ…ああ……くっ！」

雄介「無理は駄目ですよ！」

雄介「葉ここに置いときます」

「ああ」

足を怪我した兵士に肩を貸したり、薬品を医師に届けたりする。

夕方になった頃には大分落ち着き、医師からもお役目御免を言い渡された。

今は雄介は城の堀の上にいる、雄介のお気に入りの場所で休憩の時にはよく訪れる。

雄介「モグ……うん美味しい」

光翔から「お疲れさん」と言われ、もらった桃を食べる。

騒がしい喧騒の後で少しアンニュイな気持ちになる。

少し話した程度とはいえ知り合いが死ぬというのは悲しい。

これも時代なのかと無理矢理納得する。

堀の上から見える夕日に照らされる街を眺めながらボーっとしていた。

「こんばんわ」

そうしていると誰かに声をかけられる。

雄介「え？あ、こんばんわ」

声がした方を向くとそこにはピンク色の髪の女性がいた。初めて見る顔だった。

「あ、桃！美味しそう」

光翔からもらった桃は二個で、その女性はまだ手をつけていない桃を物欲しそうに見ている。

雄介「よかったら食べます？」

「いいの？ありがとう！」

雄介に桃を勧められて嬉しそうな女性
美味しそうに桃を食べる女性をみて雄介はこうゆう人が我が俤を叶えたくなる人なんだな、とか思っていた。

「そういえば、どうかしたの？」

雄介「え？」

「なんだか悲しそうだったから」

雄介「…………この前の戦で知り合いが死んだんだ」

「っ！……………ごめん、なさい」

雄介「気にしないで、もう割り切ってるから」

「……………うん」

その後は二人は無言で沈む夕日を眺めていた。

夕日も沈んで月が出てきた時、女性は口を開いた。

「よくここに来るの？」

雄介「うん、たまにだけどね」

「また来てもいい？」

雄介「別に俺に聞かなくても」

「そう…じゃあまたね」

雄介「うん、ばいばい」

お互い手を振り別れる。

雄介も部屋に戻ろうと思い歩き出すとふと思い出した。

雄介「あ…名前聞くの忘れた」

「お姉ちゃん！どこ行ってたの！？」

「ちょっとね」

「姉さん、しばらくはあまり出歩かないでください」

天和と呼ばれ、雄介と話していた女性、彼女こそが黄巾党首領張角であった。

最初に天和をお姉ちゃんと呼んだ少女は天和の次女の張宝―地和姉さんと呼んだのが三女の張梁―人和

戦で敗れた三人は名を捨て曹操に降り、陣営に加わった。

天和「ごめんごめん」

地和「まったく」

人和「……何かあったの？」

天和「え？どうして？」

人和「なんだか嬉しそう」

天和「分かる？実はおもしろそうな人にあっただ♪」

地和「おもしろそうな人？」

人和「誰？」

天和「え」とね……………」

地人「「？」」

天和「名前聞くの忘れてた」

地和「お姉ちゃん…」

人和「姉さん……………」

天和「えへへ」

なんとも締まらない出会いであった。

第十三話

雄介「……………」

「……………」モキュモキュ

曹操「……………」

「……………」プルプル

「……………」ニヤニヤ

場所は將軍などの位の高い人が酒宴を行う宴会場
机には雄介、曹操、モキュモキュと料理を食べているのは呂布、プルプルと震えているのは陳宮、ニヤニヤと笑っているのが張遼の五人の人物が着いていた。

何故このような状況になったかと、それを説明するためには時間をさかのぼる。

雄介「光翔さん、こっちの仕込み終わりました」

光翔「次は汁煮込んで！」

雄介「はい！」

この日の厨房はえらく慌ただしかった。

それは先の黄巾の乱での曹操の功績を称えるために訪れる朝廷の使者をもてなすためだ。

光翔「よし……皆お疲れ！仕込みは終わったから使者の方が来られるまでは休憩していいよ」

「「「はい！」」」

雄介「俺、会が終わったたら曹操様にお茶を頼まれているのでちょっと行ってきます」

光翔「ん、行ってらっしゃい」

陳宮「……先の黄巾の乱での功績を称え西園八校尉に任命するのです！」

曹操「は、謹んでお受け致します」

会見は何事もなく無事終了した。

会見場には曹操をはじめとする幹部、そして呂布、張遼、陳宮がいて、少しピリピリしていた空気も和らいだ。

夏侯淵「ささやかなながら酒宴を用意いたしました、がまだ時間がありますので御部屋の方でおくつろぎください」

陳宮「分かりましたのです！では恋殿行きましょうなのです！」

呂布「……………」コクッ

張遼「ほならまた後で」

そう言い三人は部屋を出ていった。

曹操「さて、私は部屋に戻るわ、後は各自自由にしなさい」

「「はっ！」」

呂布達が出ていったのを確認すると曹操も自室に戻った。

曹操「ふう………」

椅子に座りくつろぐ。

しばらくして雄介がやって来た。

雄介「曹操様、お茶を持ってきました」

曹操「入りなさい」

雄介「失礼します」

部屋に入り慣れた手つきで茶を汲む雄介

曹操「五代、久しぶりに付き合いなさい」

雄介「あ、はい、分かりました」

雄介と曹操が食堂で初めて出会って以来、曹操はたまに雄介を茶に付き合わせていた。しかし、特に何を話すでもなく、ただ静かに茶をのむだけであった。

たまに荀イクがその場に遭遇する度に雄介の精神はすり減るばかりだ。曹操はその光景を見て面白そうに笑っている。どちらがと言わないが……

曹操「……美味しいわ、また腕を上げたんじゃない？」

雄介「ありがとうございます」

曹操は一つ変わったことがある、雄介に対する態度だ、以前は言葉使いが堅い曹操だったが最近では彼女が夏侯惇等に対する口調に近いものになって来た。

その後はまた口を閉じ茶を飲む。しばらくして茶を飲み終わると雄介は茶器を片付け厨房に戻った。

食堂の入り口に着いた雄介、食事の時間でもないのに誰かがいるのに気づく。

呂布「……………」

目立つ赤髪に触覚のように伸びた二束の髪——呂布だ。

雄介（誰だろう？）

使者が来ることは聞いていたが容姿までは知らなかったので雄介は呂布が誰なのか分からなかった。

雄介「こんにちは」

呂布「……………こんにちは」

雄介「……………」

呂布「……………」

どうやら無口な子らしい、雄介のひとまずの予想だ。

雄介「どうかしました？」

呂布「……………」グウウ

雄介「お腹がすいたんですか？」

呂布「……………」コクッ

雄介「ちょっと待ってね」

厨房に入った雄介、余り物で簡単に炒飯を作る。

雄介「どうぞ、こんなものしかありませんけど」

呂布「……………」ありがとう

モキュモキュと料理を食べる様子を見て微笑む雄介

雄介（はは♪なんか可愛いな）

呂布「……………♪」

と、気付いた時には皿はすでに空になっていた。

呂布「……………お代わり♪」

雄介「（速！？）は…はいはい」

お代わりを用意して出す。そして見ていて気持ちいいくらい美味しそうに食べる。

雄介も料理をつくる身、光翔と同じように自分が作った料理を美味しそうに食べてくれて嬉しそうだ。

グウウ

雄介「あ……………」

呂布の食べっぷりを見てか腹の虫がなった雄介

呂布「……………あげる」

そう言い蓮華を雄介の顔に近づける、いわゆるあーんの状態だ。

雄介「えっと……………」

呂布「ん……………」

雄介「じゃあ、いただきます……………あむ」

気恥ずかしくしながらも好意を無駄にするのは嫌なので甘んじて受け入れる。

呂布「……………美味しい？」

雄介「う……………うん」

自分で作った料理の評価を自分に聞かれるという妙な状態であった。

呂布「よかった……………♪」

雄介「……………ありがとう♪」

互いに笑い合う二人

和やかな空気が流れる。

呂布がまた食べはじめてしばらくすると呂布の名―真名を呼ぶ声が聞こえてきた。

張遼「れーん！どこやー？」

呂布「霞……………もう行く」

雄介「あ、うん」

呂布は張遼の自身を呼ぶ声を聞き張遼の元に向かおうと立ち上がる。

食堂を出ようとしたところで呂布は立ち止まり雄介に向き直る。

呂布「……………」

雄介「？」

呂布「恋……」

雄介「え？」

呂布「名前……」

雄介「ああ…君の名前？」

呂布「……………」コクッ

雄介「恋ちゃんだね、俺は五代雄介」

恋「雄介……」

雄介「うん」

恋「じゃあ……バイバイ」

雄介「バイバイ」

手を振り、別れを告げる。

雄介「さてと…」

恋が食べ終えた皿を片付けようと厨房に戻ると、ちょうど裏口から光翔が入ってきた。

光翔「あ、おかえり……って雄介、つまみ食いか？」

雄介「あ…あはは……」

ジトーと光翔に見つめられ苦笑いの雄介であった。

第十四話

光翔「え？ 呂布將軍が雄介を呼んでる？」

料理を運んでいた女官から知らされた情報に光翔は顔を曇らせる。

光翔（何故將軍が雄介を？）

雄介と呂布の節点が全く思いつかない光翔は考えていても仕方がないので雄介を呼んだ。

光翔「雄介！」

雄介「はい！ 何ですか？」

光翔「呂布將軍が呼んでる、ちょっと行って来い」

雄介「はい……え？」

光翔「ほら、行った行った」

雄介「ええええ！？」

戸惑う雄介の背中を押す光翔

雄介は訳が分からないまま女官の後に着いて行く。

雄介「失礼します」

酒宴の間にやって来た雄介、そこでは使者と思わしき三人と曹操が食事をしていた。

そしてその中に恋を見つける。

雄介「え？恋ちゃん？」

恋の名を口にした瞬間、張遼と陳宮の目が光る。

陳宮「ちんきゅーきつくー!!」

雄介「な！？…ぐっ!!」

突然陳宮に蹴られた雄介、間一髪、腕で防御する。

雄介「な…なにを…？」

陳宮「恋殿の真名を呼ぶとは！万死に値するのです!!」

張遼「せやなあ…兄さん覚悟あるんやろなあ」

張遼は武器を部屋に置いてあるため護身用の小刀を構える。

雄介「ちよっ！……えっ！？」

曹操「……………」

曹操もこればかりは口を挟めないでいた。

恋「待って……」

雄介と張遼の間に恋が割り込む。

雄介「恋ちゃん！？」

陳宮「恋殿！？」

張遼「何しよんや？そいつは呂布ちんの……」

恋「雄介は……恋の友達」

張遼「……友達？」

陳宮「何ですと!?!」

曹操「は?」

恋の友達発言に三人は目を丸くする。

曹操「……雄介、どういうこと? 何故あなたが呂布殿の真名を」

雄介「え? 呂布殿って……もしかして、恋ちゃんが呂布…將軍?」

恋「……………」コクッ

雄介「えええ!?!」

うなづく恋に驚く雄介

飛将呂布、三國時代をかじった者ならばほとんどの人が知っている名、もちろん雄介も呂布の名は知っていた。
しかし、目の前にいる恋が呂布だとは思ってもよらなかった。

張遼「まさか……名前も知らんと真名呼びよったんか?」

雄介「そう…なりますね」

張遼「……流石に笑えんで」

曹操「で…雄介、どういう経緯で呂布殿と?」

雄介「あ、はい……」

呆れながら質問する曹操、雄介は事のあらましを話す。

張遼「あっはは♪、飯食って仲良うなるとか呂布ちんらしいわ」

陳宮「あゝんなどと羨ましいまねを！」

話を聞いて笑い出す張遼と食べさせもらうのが羨ましいのか怒る
陳宮

雄介「あはは……でも、何で俺を呼んだの？」

話題を変え、恋に問う雄介

恋「……炒飯…食べたら雄介の味がした」

どうやら最初に出会って食べた炒飯の味を覚えていて、今回、偶然
雄介が作った炒飯の味に気付いたらしい。

雄介「へえ、凄いな」

恋「うん……」

陳宮「ぐぬぬ！料理人ならばとっとと厨房に戻れなのです！！」

いい雰囲気、とまではいかないが和やかな空気が気に入らないのか
陳宮は雄介を追い出そうとする。

恋「待って…雄介も一緒に食べよ」

雄介「え！？そ…それは…」

困った雄介は曹操にアイコンタクトを送る。

曹操（…構わないわ）

雄介^{は…はい}

曹操の許可も出たので雄介は大人しく席に着く。

描写こそしていなかったがここには他の武将もいる。

武将達はこの事でざわつく。

下男が酒宴に参加するなどあり得ないことだ。それ以前に真名を授けられるなど

曹操は騒がしい一同を静め、酒宴は仕切り治した。

張遼「しかし、あの呂布ちゃんが男に興味持つとはなあ」

酒を飲みながら並んで座っている雄介を恋を見ながら呟く。

陳宮「それは聞き捨てなりませんぞ！恋殿！何故そのような貧相な男を！！」

張遼「確かに、強そうには見えんなあ」

やはり雄介が気に入らないのか恋を問いただす陳宮

しかし、恋は首を横に振り答える。

恋「違う…雄介…強い」

恋の言葉に再び周囲は騒がしくなる。

人中に呂布ありとまで言われた呂布が下男に下す評価ではあり得ないのだ。

張遼「どうゆうことや、その兄さんそんな強いん？」

恋の言葉に新しい玩具を見つけたように目を輝かせる張遼

恋「分からない……でも、強い」

張遼「はぁ？見たんちゃうんか？」

恋「……………」コクッ

張遼「……兄さんどうゆうことや？」

雄介「いや、私も……」

張遼「あゝ…しゃべり方は気にせんでええよ」

雄介「じゃあ、遠慮なく……俺も良く分かんないです」

張遼「そうかい」

内心雄介は驚いていた。まさかクウガの力に気付いたのかと思ったからだ。

雄介「何でそう思ったの？」

恋は少し考えてから口を開いた。

恋「……………何となく……そう思ったから」

張遼「はつきりせんなあ」

恋「？」

張遼「いや、ええよ」

これ以上は聞いても無駄だろうと張遼は追求を止めた。

その後は雄介は張遼からは好奇の目で見られ、陳宮からは終始睨まれ、他の将達からは奇妙な視線を向けられ、気まずい空気の中宴会は終わった。

第十五話

夏候惇「おい！五代とやらはいるか！！」

厨房にやって来た夏候惇、第一声に叫ぶ。

光翔「……雄介でしたら庭の掃除に行っていると思います」

夏候惇「そうか！」

夏候惇はそれだけ聞くと厨房を出ていった。

光翔「大丈夫かな雄介」

夏候惇が出ていった後を見ながら呟く。

あの会見の日以来城の中は雄介の噂でもちきりだった。

一番の噂は雄介が恋に強いと評価されたことで、血の気の多い武将、特に夏候惇は手合わせをしようと雄介を探していた。

雄介「……よし」

掃除も粗方終わった雄介、ゴミを捨てに行こうと歩き出す。

夏侯惇「おい！」

雄介「ん？」

しかし夏侯惇に声をかけられ立ち止まる。

夏侯惇「お前が五代だな？」

雄介「はい」

夏侯惇「手合わせをしろ！」

雄介「手合わせ……ですか？」

夏侯惇「ああ！呂布が認めたというお前の力を見てみたい！」

雄介「は…はあ」

夏侯惇「よし行くぞ！」

そう言って有無を言わず雄介を連れていく夏侯惇
残されたゴミは空気を読んだ女官が処理した。

場所は変わり調練場、雄介と夏侯惇が試合をすると聞いて曹操も含め大体の武将や兵士が集まっていた。

狼乾「おい、大丈夫なのか？」

雄介を心配して狼乾がやって来た。

雄介「うん、大丈夫」

固く笑う雄介、本当は大丈夫でもなく、正直こんなこともしたくないのだが剣道の延長線みたいなものと考え無理矢理納得しているのだ。

狼乾「……………そうか、怪我するなよ」

雄介「うん」

狼乾に手伝ってもらいながら防具を着る。

夏侯惇は既に準備が終わっていて中央で待っている。

狼乾から刃を潰した剣を受け取り雄介も前に出る。

夏侯淵「両者、準備はいいか？」

夏侯淵が審判として確認をとる。

夏候惇「ああ」

雄介「はい」

夏候淵「……では始め！」

夏候淵の号令で試合が始まる。

夏候惇「はあああ！！」

先に動いたのは夏候惇だった。

雄介「ぐっ！？」

夏候惇の一撃を剣で受け止める。
そのことで観客はざわつく。

夏候惇「私の剣を受け止めるとは……やるようだな」

一旦離れてから雄介に話しかける。

雄介「ど…どうも（いっ…痛い！）」

とりあえずは冷静を装うが内心は夏侯惇の剣の重さに驚いていた。

夏侯惇「では行くぞ！」

再度切りかかる夏侯惇

雄介「っ！」

それをバックステップで避ける。

夏侯惇「はっ！」

さらに夏侯惇は追撃をかける。

雄介は横に飛ぶ。

夏侯惇はもう一度横に振り切る。

しかし雄介はさらに避ける。

それからしばらく同じようなことを繰り返していると夏侯惇がついにキレた。

夏侯惇「ええい！チョコマカと！お前やる気があるのか！！」

卑怯を嫌う夏候惇だからか逃げてばかりいる雄介が苛立つようだ。

雄介「は…はい」

夏候惇「ならばお前からかかって来い!!」

そう言っているとその場で構える。

雄介「……………っ」

その姿を見て雄介はためらう。

夏候惇「どうした!来い!」

雄介「……………せん」

夏候惇「なに?」

雄介「出来ません」

雄介は攻撃する事が出来なかった。
あくまで剣道の、スポーツの延長線と考えていたがこれは人を殺すための訓練なのだ。

下手をすれば大怪我もする。

雄介にはこれ以上は出来なかった。

夏侯惇「腑抜けが……」

肩が震えている雄介を見て吐き捨てるように言う。

夏侯惇「興が覚めた」

夏侯惇はそのまま調練場を出ていった。

観客も期待はずれといったように出ていく。

後には雄介と狼乾が残された。

夏侯淵「姉者」

夏侯惇「秋蘭か」

夏侯淵「不満そうだな」

夏侯惇「当たり前だ、あの呂布が認めたという男、どれほどのもの

かと思っただが」

夏候淵「期待はずれ……か」

夏候惇「ああ」

夏候淵「ふむ……私はそうでもなかったがな」

夏候惇「ん？ なにか言ったか？」

夏候淵「いや」

夏候惇「そうか、では行くぞ」

夏候淵「ああ（しかし五代雄介……化けるか？）」

歩き出した夏候惇の後を着いていく夏候淵、その顔は面白い物を見つけたように笑っていた。

第十六話

夏候惇との試合の翌日、見るからに落ち込んでいる雄介は光翔から一日休みをもらい、街に出ていた。

適当に店を見て回ると元々好奇心が強い雄介なので、この時代の物見ている内にいつもの元気が戻ってきた。

雄介「本……やっぱり高いな」

本屋にやって来た雄介、本をみて悩んでいた。

最近の雄介が欲しい物の一つが本であった。雄介も多少ならばこの時代の字も読み書きができ色んな本を読みたいと思っていた。

しかし、値段が高い本を薄給の雄介には買うことが出来なかった。

城の本を読もうにも下男という身分では書庫に入ることも出来ない。

雄介「うーん……………」

「五代」

雄介「え？」

しばらく本とにらめっこしていて、本屋の主人に訝しがられる場合

いに声をかけられた。

雄介「か…夏侯淵將軍」

夏侯淵「ああ」

声の正体は夏侯淵だった。

夏侯淵「お前……字が読めるのか？」

雄介「はい、多少でしたら」

まさか雄介が字を読む事が出来るとは思っていなかったらしく、夏侯淵は顔には出さないが驚いていた。

夏侯淵「何やら悩んでいたようだが、欲しい本でもあるのか？」

雄介「えっと…この本です」

雄介が指したのは儒教の本

夏侯淵「ふむ、これか」

そう言うのと夏侯淵はその本を手に取り主人の所へ向かう。

夏侯淵「主人、この本を買おう」

主人「これは、どうもありがとうございます」

夏候淵は主人に代金を払い、雄介の所へ戻って来て、その本を雄介に差し出す。

夏候淵「ほら」

雄介「……………え？」

本を差し出された雄介、夏候淵も本が欲しかったのか、としか考えていなかったため一瞬呆ける。

夏候淵「昨日は姉者が迷惑をかけたからな、まあ受け取ってくれ」

雄介「そうゆうことでしたら……………遠慮なく」

人の好意を無下にするのは嫌なので雄介は素直に受け取る。

夏候淵「ではな」

雄介「はい、失礼します」

本屋を出た所で二人は別れた。

雄介「さてと……………」

「雄介！」

雄介「うん？」

欲しかった本が手に入ったのでホクホク顔の雄介
これからどうしようかと考えていると、再び声をかけられた。

振り返るとそこには以前、城壁で出会った女性——天和がいた。

雄介「あ、天和ちゃん」

天和「やっほ♪」

あの日以来、雄介と天和は度々会っていた。

二回目に会った時には名前も交換し世間話をする間柄になった。
『数え役萬姉妹』としてアイドル活動をしていると知った時は流石に驚いた。

雄介「城壁以外で会うのは初めてだね」

天和「そうだねー、雄介は何して……」

地和「お姉ちゃん！」

人和「ちい姉さん、急に走らないでください」

後から地和と人和がやって来た。

雄介「やあ、地和ちゃん、人和ちゃん」

地和「あ、雄介、久しぶりー」

人和「こんにちは雄介さん」

以前に天和から紹介されたので雄介は二人とも知っていた。

天和「ところで雄介は何してたの？」

雄介「休みをもらってね、散歩してた」

天和「そうなんだ、あ、お昼もう食べた？」

雄介「いや、まだだけど」

天和「私達今からだから一緒に食べない？」

地和「あ、いいね、行こうよ」

雄介「うん、いいよ」

天和「よし、じゃあ行こう」

そうして四人は料理屋に向かう。
しばらく歩いていると少し高そうな料理屋に着いた。

雄介は店の外観を見て顔をひきつらせる。

天和「どうしたの？」

雄介「えっと…俺今日はそんなに持ち合わせが………」

天和「お金無いの？」

雄介「う…うん」

地和「だったら大丈夫、ちい達が奢ってあげる、いいでしょ人和」

人和「ええ、構わないわよ」

雄介「じゃあ……お言葉に甘えて」

天和「じゃあ入ろう」

ここで変な意地を張っても仕方がないのでお返しは今度しようと思
い天和達の後に着いて行く。

その後、昼食を終えた雄介、三人と一緒に城に戻る。

久しぶりに心休まる日を送れた雄介であった。

第十七話

それは雄介がいつものように曹操に茶を用意した時だった。

雄介「どうぞ」

曹操「ありがとう」

雄介「失礼し……北郷……一刀？」

下がろうとした際に報告書のような物が目に入った。

そこには天の遣い——北郷一刀の名前が書かれていた。

雄介はその名前に違和感を抱いた。

中国人というよりは日本人、さらには現代を思わせるようなイントネーション

そして劉備と並ぶ程の人物であるのに雄介は北郷一刀という名前を全く聞いた事が無く、天の遣い等という存在も知らない。

曹操「……北郷がどうかしたのかしら？」

雄介「あ、いえ……少し気になったので」

曹操「……………そう言えば五代は北郷と同じで字が無いと言っていたわね」

雄介「あ、はい」

曹操「……………何となくだけど、似たような雰囲気の名前ね」

雄介「……………そうでしょうか？」

曹操「……………何となく……………ね」

雄介「……………」

曹操「……………まあいいわ、下がちなさい」

雄介「……………失礼します」

曹操「……………」

曹操は雄介が出ていった扉を見つめる。

曹操「……………今はまだ、早計ね」

雄介「字か……真名も考えた方がいいかな」

厨房に戻る最中、雄介はそう呟く。

雄介「やっぱりここじゃあ無いと怪しいよな」

今更ではあるが雄介はここが自分のいた世界ではないと分かっていた。

最初はただタイムスリップしただけなのかと思っていた、しかし、真名という文化、男性だったはずの武将達、雄介も始めは混乱したがすぐに馴染んだ。

そして今になりこの時代、この世界で字と真名が無いのは余計な誤解を与えかねないことを雄介は危惧し始めたのだ。

雄介「クウガ……空我？……ゴウラム？……一条……いやいや、無い無い……玉三郎……もっと無いって」

夏候惇「何をブツブツ言っている」

そんな風に呟きながら歩いていると夏候惇に声をかけられた。

雄介「夏候惇様……いえ、何でも」

夏候惇「ふんっ……」

適当に流すと夏候惇は苛立たしげに去っていった。

雄介「……はあ」

夏候惇の姿が見えなくなると雄介はため息を吐く。

あの試合以来、雄介は夏候惇に苦手意識を持ち、夏候惇は雄介に苛立ちを覚えた。

理由は雄介の暴力嫌い、夏候惇はそんな雄介を軟弱者だと思ったからだ。

雄介もスポーツならばボクシング等も許容範囲だ。しかし、夏候惇のそれはただの戦闘好き、これは言い過ぎかもしれないが悪人であれば斬ることに戸惑いは無い（あくまでも悪人で曹操や民を守るため）。

雄介も夏候惇は皆を守るために闘っているのは分かっている。

しかし、まだ納得できていないのも事実だ。

夏候淵「すまないな、五代」

雄介「夏候淵様」

物影から夏候淵が出てきた、どうやら先ほどのやり取りを見ていたようだ。

夏候淵「姉者は自分を曲げないと言うか、短絡的と言うか……」

雄介「大丈夫です、考え方は人それぞれです」

夏候淵「……そうか、所で何か悩んでいたようだが？」

雄介「えっと……実は訳あって私は字と真名が無いので、何か新たに考えようかどうかと……」

夏候淵「……特に詮索はしないが真名とは大事なものだ、よく考えろ」

雄介「はい、ありがとうございます」

夏候淵「うむ、ではな」

雄介「はい、失礼します」

雄介は夏候淵を見送り、ふと空を見上げる。

雄介「どうしよっかなー」

第十七話（後書き）

と、言うわけで勝手ながらアンケートを御取りしたいと思います。
よろしければ御協力お願いします。

内容は、雄介に字と真名を付けるかどうか。（正直あまり本編には
影響しません。）

そして何か提案があればお願いします。

第十八話（前書き）

今回の雄介に字と真名を付けるにあたり、KAME!!さん、Kさん01さん、ベルデさん、オースチンさん、ごひさん、ニヒル青年さん、ichievaさん、スーサンさん、terexさん、アギトさん、千支さん、ホウホウさん、御協力ありがとうございました。

お手数ですが後書きにも目を通して頂けると嬉しいです。

今回の話は付けた、というだけなので少し内容は薄めです。

第十八話

雄介「よしっ！これにしよう！！」

休憩中、厨房の裏で悩んでいた雄介
しばらくして決心したように頷く。

光翔「おっ、決まった？」

雄介「はい！今日から俺は姓は五代、名は雄介、字は凜人^{リント}です！」

雄介が考えていたのはそう、字、以前曹操との会話で字が無いと不振に思われると判断し、字をつけることにしたのだ。

光翔「凜人？変わった字だな」

雄介「えっと…とりあえず思いついたので」

光翔「そっか、響きもいいし、いいんじゃないか？」

雄介「ありがとうございます！」

光翔「ん？そういえば真名は考えなかったのか？」

真名——その名を呼ぶならば例え斬られようと文句も言えない神聖なもの

もちろん雄介は真名ももっておらず、付けようかと考えていたのだ
が……………

雄介「真名は考えてません」

光翔「……何でだ？」

雄介「字と真名を考える時、光翔さんや狼乾、他の人にも相談しました。皆の話を聞くうちに真名っていうのは本当に大切な物なんだなって思っただけです」

光翔「うん」

雄介「それで、そんな大切な物をちょっと考えた位で付けるのは皆に失礼なんじゃないかって、それに俺の名前は真名こそは無いけれど父さんと母さんが付けてくれた大切な物だから、俺はこの名前を大切にしたいんです」

光翔「……………ップフ」

雄介の話を聞いた後、何故か吹き出した光翔、雄介はそれに戸惑う。

雄介「えっ？俺何か変なこと言いました？」

光翔「いや、違うよ、ただ……雄介らしいなって」

雄介「俺……らしい、ですか？」

光翔「ああ、とりあえず自分よりも他人を先に考えるとか、細かいことは気にしないっていうより掟や慣習なんかより大切な物を知っているっていうか……まあ、そんな感じ」

雄介「はあ……？」

光翔の言葉の意味がよく分からない様子の雄介

光翔「ま、俺は俺、雄介は雄介、人は人ってとこかな」

雄介「……はい！」

光翔「よし、休憩終わり！とっとと働け、飯の量減らすぞー？」

雄介「はい！」

光翔の冗談に笑顔で返す雄介

この日の空は透き通るような青空だった。

第十八話（後書き）

えー、と言うわけで、雄介の字はオースチンさんの提案を取り入れまして「凜人」に決定いたしました。理由は単純に自分が気に入ったからです。

今回、御協力してくださった皆さん、本当にありがとうございます。

真名を付けなかった理由は本編の通りと、アギトさん、干支さん、ホウホウさんの言う通りだと思ったからです。

真名を考えてくださった皆さんには申し訳ありませんが上記の通りですのでご了承下さい。

これからも、よろしくお願いします。

第十九話

雄介「……………」

沈痛な表情の雄介、今雄介はシ水関から離れた陣にいた。
反董卓連合の陣にだ。

袁紹からの反董卓連合参加の檄文を受け取った曹操は、これを機と
思い連合に参加した。

その際、雄介は雑用として行軍に参加していた。

開戦間近ともあり士気が高揚している周囲とは反対に、雄介は戦争
という最も愚劣な行為が行われることに胸を痛めていた。

兵士「おい！何呆けてる！」

雄介「す…すみません！」

軍という組織に所属している以上、雄介は働かなければならない。

雄介「……………ギリッ」

荷物は運びながら雄介は強く歯噛みする。

この戦争を止めることの出来ない自分を許せないからだ。

場所は変わり洛陽

恋「……………」

賈馱「頼んだわよ、恋」

恋「……月、守る」

虎牢関防衛を任された恋、主君である董卓を守ることを決意する。

董卓「…………詠ちゃん」

賈馱「月、大丈夫、月は僕が守るから」

董卓「…………うん」

董卓、世間では極悪非道、酒池肉林を囲い、贅の限りを尽くす、等と言われているがこの少女は儚げで、そのような噂とはかけ離れた印象だった。

それもそのはず、董卓は噂とは正反対の人物であった。

心優しく、民草を大切に思う董卓は何進や十常侍の権力争いに巻き込まれ、いつの間にか暴君に仕立て上げられたのだ。

そして諸侯の名を上げるために生贄にされる。

董卓の幼なじみである賈馱は再び決意する。

賈馱 「月は……僕が守る」

曹操 「私達は好きにさせてもらうわ」

そう言って曹操は天幕を出ていった。

後ろから袁紹の静止の声が聞こえるが気にしない。

先ほどまでシ水関を攻める為の軍議を、いやそれ以前に総大将を決める話し合いをしていた。

その場の全員が大将になるのを渋るなか、袁紹はいかにもというように遠回しに自分をアピールしていたが結局、劉備の軍師、諸葛亮

の進言により総大将は袁紹に決まった。

それからは特に軍議も進まずうやむやな空気になり曹操に続き、諸侯達は天幕を出ていく。

曹操「戻ったわ」

夏侯惇「お帰りなさいませ華琳様！」

自陣に戻って来た曹操を夏侯惇が出迎える。

夏侯淵「軍議はどうでしたか？」

曹操「……………」

先ほどの軍議を思い出し頭を痛めながらも会議を始める。

その頃、天幕の外では……………

「へえ……………ふうん……………」

雄介「……………あの」

雄介は見知らぬ女性に絡まれていた。身体をあちこち見られ雄介は戸惑う。

「いい加減にしたらどうじゃ、困っているぞ」

その女性は後ろにいたもう一人の女性に声をかけられる。

「あ、ごめんなさいね」

雄介「い…いえ」

声をかけられた女性は雄介に謝る。

「ねえ、あなた……何者？」

雄介「私ですか？曹操軍の者ですが」

「いやいや、そうじゃなくて……あ、自己紹介もまだだったわね、私は孫策、一応袁術の下にいるわ、今はね……で、こっちは黄蓋」

雄介「……………五代雄介です」

まさかまた有名な武将に声をかけられるとは思っていなかったため雄介は内心驚いていた。

孫策「それで、あなたは何者？」

雄介「で…ですから、俺は……」

孫策「誤魔化しはいいわ、カンだけど私には分かるの、あなたは普

通じゃないって」

雄介「……………」

冷や汗が流れる、まるで自分を見透かされるような瞳に見つめられて。

唾を飲み込み、口を開く。

雄介「お…俺は……」

曹操「うちの使用人が何か粗相でもしたかしら？ 孫策殿」

孫策「あら曹操」

外の様子に気付いたらしい曹操がやって来た。

孫策「いえ別に、この人あなたの所の？」

曹操「ええ」

孫策「へえ」

曹操「……………」

孫策「……………」

雄介「あ…あの」

黄蓋「ん？どうした？」

二人の空気に耐えられず黄蓋に助けを求める。

雄介「いったい…何が」

黄蓋「気にしない方がいい、いつもの気まぐれみたいなものじゃ」

雄介「はあ………？」

孫策「あつと、忘れてた、挨拶に来たんだった」

曹操「挨拶？」

孫策「そ、今回はよろしくってことで」

曹操「……ええ、よろしく」

二人は握手を交わす。

孫策「それじゃ失礼するわ」

曹操「ええ」

そう言い孫策は曹操の陣を去って行く。
その際孫策は雄介にも声をかけらる。

孫策「またね、雄介」

雄介「え、あ、はい」

曹操「……………」

その様子を難しい表情で見ていた曹操であった。

黄蓋「で…どうだったのじゃ、五代とやらは」

孫策「んー面白い……かな？」

黄蓋「面白い？」

孫策「ええ、あんな人は初めてね、それに強い」

黄蓋「ほう、それもカンか？」

孫策「そうね♪」

黄蓋「ふむ」

孫策「一度剣を交えてみたいわねー」

黄蓋（あの青年も困った方に目をつけられたものじゃ）

孫策に興味を持たれた雄介に、人知れず同情する黄蓋であった。

第二十話

関羽「はあああ!!」

華雄「うおおお!!」

シ水関、連合軍と董卓軍がぶつかり合い、関羽と華雄の一騎討ちが行われていた。

雄介「……………」

そんな中、連合軍本陣では、雄介は戦場の方を沈んだ表情で見つめていた。

雄介は胸が引き裂かれる思いだった。

今日の前行われている戦いを止めることが出来ない。

旅をしていた頃、紛争等に巻き込まれたことは一度や二度ではない、平和な日本に生まれた雄介だが戦争の辛さは誰よりも理解している。その度に傷つく人たちを見て無力な自分を虚しく思う。

雄介「……………っ」

天幕に入り麻袋を取り出す。

中に入っていたのはアークルだ。

グロンギのいるかどうか分からないこの世界ではクウガに変身するつもりも無いが念のためと御守り代わりにと雄介は持ってきていた。

雄介「俺は…俺はどうすれば……何をすればいいんだ」

アークルを見つめ、誰かに問いかけるように呟く。

張遼「ちよいちよい」

雄介「え？張遼様？」

シ水関の戦いも終了し、兵士たちの配給も終えた雄介、昼間のこともあり、早めに休もうと思っていたところで張遼に声をかけられる。

雄介「何で張遼様がここに………？」

張遼が董卓軍にいることは知っていた雄介、なので今ここに張遼がいることに驚く。

張遼「いやあ、色々あってな、今はこっちに付いとんねん」

雄介「はあ……」

張遼「で、兄さん今暇な？」

雄介「はい」

張遼「なら、ちよいと晩酌付き合ってくれへん？大将に酒は許してもらったんやけど一人で飲むのもあれやし」

雄介「ではお付き合いします、何かツマミでも？」

張遼「いや、かまへんよ、軽く飲んだら終わるし」

雄介「はい、分かりました」

ということで雄介は張遼の酒に付き合うことになった。

張遼「はあ……」

酒も入り少し顔を赤くした張遼、ふいにため息を吐く。

雄介「どうかされましたか？」

張遼「ん？いや、世知辛いなーって」

雄介「世知……辛いですか？」

張遼「せやねん、部下を守るためとはいえ、仲間と敵どうしになるとか嫌んなるわ……ま、今回はもう戦には出んて大将には言っとるけどな」

雄介「……………」

張遼「……兄さんもなんかあったんかいな？」

雄介「え……？」

張遼「いや、酒に誘ったんは一人で飲むのは寂しいのもあったんやけどな、兄さんがエライ暗い顔しよったけんねや」

雄介「……………」

張遼「身分なんか気にせんでええ、聞くで？ま、嫌やったらええけど」

雄介「……………あの」

張遼の言葉に促され、雄介はゆっくりと口を開く。

雄介が昼間に思った事を話すと張遼は目をつむり考える素振りをする。

しばらくして張遼は先ほどとは一変し、真剣な目付きで雄介の目を見て話し出す。

張遼「……………つまり、兄さんはこんなくだらん事を止めたいと」

雄介「はい」

張遼「んで、そんな力の無い自分が情けない」

雄介「……………はい」

張遼「……………自分、アホか？」

雄介「……………え？」

張遼「自分は平和を愛しとる、平和が一番なのになのに何で皆は殺し合うんや？アホか？皆アホなんか？……………兄さんが言いたいのはそうゆうこっちゃろ」

雄介「そ…そんな……………」

張遼「アンタ、何や？悲劇の主人公気取りか？ウチやってな、いや、他の奴やって戦なんか間違っとする事くらい分かつとんや！！平和が一番ええことくらい知っとる！！でも人ってのは争いからは逃げれんや、この世の中じゃあのほほんとおれんや！ウチやって人を殺したりしたない！美味しい酒飲んで、強い奴と力比べして、のんびりしたいんや！でもな、月の大事な民を守るために闘ったんや！闘わなあかんのや！！」

それを何や？自分だけ、苦しんでます？辛いんです？大概にしい！しんどいのはアンタだけちゃうんや！皆、皆苦しいんや！大切なモン守るために必死に足掻いどんねや！！」

雄介「あ……あ、あ」

張遼の独白に言葉を詰まらせ、目が泳ぐ雄介

そんな雄介を見て張遼は興奮が冷めたのかはっとする。

張遼「……すまん、言い過ぎた」

雄介「………い……いえ」

張遼「……堪忍してな、兄さんが辛いのも分かる、けど辛いのは皆一緒やねん」

雄介「………はい、俺こそすみません」

張遼「……うん、これでウチのこと嫌わんといてな、仲間裏切った以上、もう恨まれんのは嫌やから」

雄介「っ………はい！」

張遼の言葉に悲しみを感じた雄介、これ以上悲しませないように力強く答える。

張遼「また…酒に付き合ってな、あと二人の時には敬語はいらん」

雄介「……分かった」

張遼「ほなな、雄介」

雄介「うん」

こうして二人は別れる。

今宵は互いに新たな友と出会うことが出来た夜だった。

第二十一話

シ水関を攻略した連合軍、次に待ち構える虎牢関を攻める前の小休止としてシ水関にとどまっていた。

狼乾「これを運べばいいのか？」

雄介「うん、頼むよ」

荷物を運んでいた雄介、一人ではきつかったのでちょうど通りかかった狼乾に応援を頼む。

狼乾「しかし、次は虎牢関か」

雄介「そうだね……狼乾、死んだらダメだからな」

並んで歩いていた雄介と狼乾、不意に雄介は立ち止まり狼乾の目を真っ直ぐ見てそう言う。

狼乾「雄介……ああ」

雄介の言いたい事を理解した狼乾、確りと頷く。

狼乾「にしても最近変わったな、お前」

雄介「そう？」

狼乾「ああ、なんていうか、吹っ切れたというか」

雄介「変わった……のかな？」

張遼の独白以来、雄介は少なから戦争に対する認識が変わった。

何が、というわけではないが、ただ真っ向から戦争を否定するとうことは戦争に関わる全ての人を否定するかもしれないと考えたからだ。

それでも少しながら、というのはあくまでも現代に生きた雄介、旅で内戦等を経験したといえども戦争に関わる人の想いを理解するのも今はまだ難しい。

だが雄介は

雄介（今はまだ俺に力は無いけれど、これから起こる争いを止めてみせる！）

張遼の想い、人々の想いをわきまえた上でそう決意する。

狼乾「よっ……と」

雄介「ありがとう、助かったよ」

狼乾「どうってことねえよ」

雄介「うん…あ、これ食べる？」

そう言って雄介が取り出したのは干し肉

狼乾「干し肉？ありがてえがどうしたんだこれ？」

干し肉を受け取る狼乾、少し疑いながら食べる。

雄介「くすねた」

狼乾「ぶっ？」

雄介「冗談だよ♪」

狼乾「お前なあ……」

雄介「光翔さんがくれたんだ」

狼乾「ふうん」

雄介「はい、最後の一個あげるよ」

狼乾「ん？ああ……」

雄介が狼乾に最後の干し肉を渡そうとした瞬間、誰かが二人の間に
入って干し肉を奪った。

「はむっ！」

二人「「うお?!」」

孫策「あら美味しいわね」

雄介「って孫策様!？」

狼乾「なっ!？」

干し肉を奪ったのは孫策だった。

呑気に味の感想を述べる孫策に対し、狼乾はまさか関わることの無いような人物が現れたことに驚く。

孫策「ヤッホー♪雄介」

雄介「こんにちは、孫策様」

狼乾（おい雄介！孫策様と面識があるのか!？）

自国ならまだしも他国の大物と気軽に挨拶する雄介を信じられないと言った風に耳打ちする。

雄介（うん、少し話したくらいだけど）

雄介はあっさりと言うが狼乾にしてはあまりにも規格外だった。

ただでさえ曹操からは気に入られ、呂布には友と呼ばれ、そしてだめ押しの孫策だ。

狼乾もこんな風には言いたくないが雄介はあくまでも一使用人だ、上記の様な人達と交流を持つなどあり得ない。

狼乾（こいつ……本当に何者だ？）

故に呆れに近い驚きしか出なかった。

雄介「ところで孫策様は何をしていたのですか？」

孫策「ちよつとぶらぶらしてたの、しばらくはここにいるからどうも暇でさー、そしたら雄介を見つけてね」

雄介「そうですか」

孫策「それで雄介、彼は？」

孫策は雄介の隣で顔をひきつらせている狼乾について尋ねる。

雄介「彼は狼乾、俺の親友です」

狼乾「そっ……曹操軍に……しょっ……所属している狼乾です……！」

ガチガチに緊張している狼乾、いやむしろこれが普通なのだが。

雄介「狼乾？」

いつもは気丈な狼乾が緊張しているのを不思議に思う雄介であった。

孫策「あはは♪そんなに緊張しないでいいわよ」

狼乾「は…はい」

孫策「ところで雄介…「雪蓮ー！」やばっ冥琳！？いい二人とも？私は見なかった、いいわね」

雄狼「「はあ…」」

孫策「じゃ！」

孫策はそう言うのと早々と去って行った。

「そのの！」

雄狼「「はい？」」

二人が呆けていると黒髪で挑発の女性に声をかけられる。

「孫策様を見なかったか？」

狼乾「え？あー…」

雄介「いえ、存じ上げません」

「そうか……邪魔したな……まったくどこに行ったんだ！？」

その女性もそれだけ言うと言って行った。

狼乾「何だったんだ？」

雄介「さあ……？」

騒がしく過ぎる戦の合間の一時だった。

第二十二話

シ水関の戦いから数日後、連合軍は虎牢関を攻めていた。

張飛「やあああ!!」

関羽「はああああ!!」

恋「ふん……」

二人がかりで向かってくる張飛と関羽を恋は軽くないです。

関羽「くっ!」

恋「……弱い」

何合と打ち合うが分は恋の方にあつた。

夏侯惇「飛将呂布! いざ尋常に勝負!!」

呂布「……っ!」

優勢であつた呂布、しかし、夏侯惇の乱入によりその流れが変わる。

―連合軍・本陣―

雄介「……………」

シ水関の時と同じく雄介は連合軍本陣で戦を見守っていた。

張遼「そう暗い顔すんなや、体もたんで」

雄介「張遼様……」

前回との違いが一つ、それは張遼がいることだ。

張遼「ほれほれ、顔固いでえ」

雄介「ひょっ！ひょうりようはは！？」

張遼は雄介の顔をグニーッと引っ張る。

張遼「暗かったら暗なるだけや、時には嘘でも笑いい」

ニカッと笑う張遼

雄介「……はい！」

張遼「それでよしっ」

張遼のおかげで多少は雄介の気も紛れた。

兵士「張遼様！」

しばらくすると張遼の部隊の兵士がやって来た。

張遼「どした？」

兵士「前線より通達、呂布殿と交戦し、現在は連合軍が優勢、虎牢関突破も時間の問題かと」

張遼「……そか、下がってええよ」

兵士「はっ！」

兵士からの伝達を聞いて張遼は思案する。

張遼「……恋、死ぬ……か？」

雄介「っ！？何で恋ちゃんが！？」

張遼「恋は確かに強い、自分とここに置きたい奴もおるやろ……でもあんな性格やし多分誰にも従わん、やったら後は処刑……や」

雄介「そんな……何とか出来ないんですか！？」

張遼「雄介！……これが戦っっちゃうことや」

雄介「っ！……」

雄介は歯噛みする、友達が殺されるかもしれないということに。

張遼「変な気起こしたらアカンで、アンタが行ったって、何もなら

ん、大人しくしとき」

そう言って張遼は踵を返す。

雄介「……………ですか？」

張遼「……………何や？」

雄介「俺は！友達を見殺しにしなきゃいけないんですか！！」

雄介は叫ぶ。

張遼「雄介……………」

雄介「俺は皆の笑顔を守りたいって思っていました、でも、皆の笑顔を守る為に、友達を見殺しにしなきゃいけないんですか？」

張遼「……………雄介」

張遼はワガママな子供をあやすように言う。

張遼「ウチやって見殺しにはしとうない、一緒に闘った大切な仲間や、出来るなら助けたい、でも、ウチでさえこの連合軍全員相手する力はないんや……………それでもアンタはまだそんなことほざくんか？」

雄介「やってみなくちゃ……………分からない」

雄介の言葉に張遼遂にキレた。

張遼「雄介！いい加減にしい！アンタにもウチにももうどうしよう

も無いんや！それとも何や？アンタに恋を守る力があるんか！？」

『守れる力』——雄介は一つだけ思い浮かんでいる。

張遼「どうなんや！？」

『闘う力』でも『倒す力』でもない、『守る力』

雄介「……………ある」

張遼「っ！？何…？」

雄介「俺にはある！守れる力が！！」

張遼「……………」

雄介「……………」

見つめ合う雄介と張遼、不意に張遼が口を開く。

張遼「出来るんか？」

雄介「……？」

張遼「あの子を守れるんか!？」

雄介「……………はいっ!!」

張遼の問い雄介は力強く答える。

張遼「あの子らを守ってくれるんか……？」

雄介「はい」

張遼はさすがのように雄介の肩に手をかける。

張遼「あの子らを……………守ってくれ」

雄介「……………はい」

雄介はその場を後にし、天幕に戻る。

そして『守る力』を手取る。

雄介「俺に、もう一度力を貸してくれ」

それを自分の腹部に添える。

雄介「ぐっ!?!?っがあああああ!?!」

陣に雄介の叫び声が響いた。

―虎牢関―

恋「はあっ……はあっ……」

虎牢関を守っていた恋、致命傷こそないが体は傷だらけだった。

序盤は優勢だった恋、しかし、流れは夏侯惇が乱入したことで変わった。

いや、夏侯惇が原因では無い、夏侯惇が乱入した際に見えた物が恋の集中力を途絶えさせたのだ。

恋が見たもの、それは曹操の旗だった。

思い出したのだ、友が、雄介がいた場所を。

それにより生まれた一瞬の隙を関羽と張飛は逃さなかった。

それからは流れは連合軍に寄り、恋は押される形になっていた。

夏侯惇「はああああ!?!」

夏侯惇が横一閃に切りかかる。

恋「っ！」

恋は夏侯惇の一撃を受け止め、いなす。

関羽「もらった！！」

恋「っ！？」

関羽はこの機を逃さまいと上段から振り下ろす。

関羽「っ！？」

しかし、関羽の腕は振り上げた状態から動かなかった。

関羽は何事かと振り返る。

関羽「なっ！？」

そこには、金色の角、虫のような赤い複眼の仮面、そして深紅の甲冑——クウガが青龍偃月刀を掴んでいた。

楽進「クウ……ガ？」

その様子を見ていた楽進が呟く。

関羽「はっ：離せ！」

関羽はクウガの手を振りはなそうと力を入れるがびくともしない。

張飛「愛紗を離せ！」

張飛がクウガに切りかかるがクウガは小さく呟く。

クウガ「超変身」

するとクウガの体は赤から銀色で紫のラインの姿、クウガタイタンフォームに変わった。

ガギン！

張飛「なっ！？」

張飛は甲冑の色が変わったのと自分の攻撃を喰らっても平然としていることに驚く。

クウガTF「ごめん」

関羽「何？っキャア！？」

クウガTFは先に謝りをいれてから関羽に足払いして転けさせる。

そして周りが混乱している内に恋を抱える。

クウガTF「恋ちゃん、大丈夫？」

恋「雄…介…?」

声を聞いて恋はクウガTFの正体が雄介だと気がつく。

クウガTF「うん…あ、恋ちゃん、今から飛ぶからしっかり捕まっ
てて」

恋「?」

クウガTFの言葉に意味が分らないと首を傾げる。

クウガTF「超変身」

クウガTFの体は銀から青、クウガドラゴンフォームに超変身する。

クウガDF「はっ！」

「「!」」

クウガDFはその跳躍力をいかし一気に城壁まで飛ぶ、恋を含めた
周りの人達はクウガDFの跳躍力に目を丸くした。

陳宮「たっ…退却の鐘を！」

兵士「は…はっ！」

その光景を終始見ていた陳宮、すぐに気を取り直し、兵士に退却の

鐘を鳴らさせる。

この戦場に居たものの全員が訳が分からないまま、今日の戦闘は終了した。

第二十三話

―連合軍・天幕―

袁紹「何ですの！あの者は！？」

袁紹は苛立ちを隠さないでいた。

それもそのはず、今回の戦で最も強固な障害であった呂布
そんな呂布をあと少して討ち取ろうしたというのに謎の戦士、クウ
ガに邪魔をされたのだ。

クウガの登場は諸侯にも波を立てた。
あの人間離れた身体能力、色、形が変わる鎧、中にはモノノケと
疑う者もいた。

そんな中、最も心中穏やかでない者が一人、劉備、関羽、張飛を率
い、天の御遣いと称される北郷一刀だ。

一刀「4号……」

諸葛亮「え？何ですか御主人様？」一刀の呟きに軍議に付き添って
いた諸葛亮が反応する。

一刀「あいつは……未確認生命体第4号、元の……天に居た奴だ」

一刀の言葉に諸侯は再びざわつく。

曹操「どうゆうことかしら？」

一刀「あいつは俺が居た世界にいた奴なんだ」

孫策「それはその4号も天の御遣いってこと？」

一刀「分からない……一つだけ分かるのはあいつはとんでもない力があることだけ」

雄介の闘いを知らない一刀はそれだけ告げる。

一刀の言葉は諸侯はしずまりかえる。

今回の軍議は諸侯に不安を掻き立てるだけに終わった。

――曹操軍・天幕――

曹操「……………」

曹操はこれからの事を考える。

張飛の一撃を喰らっても動じず、城壁までとぶ身体能力、どうにか自分の手中に呂布と共に置けないかと。

楽進「華琳様、よろしいですか？」

そうしていると楽進がやって来た。

曹操「風？何かしら？」

楽進「先の戦いで呂布を助けた者なのですが……」

曹操「4号のこと？」

楽進「4号……？」

楽進は予期していなかった名前に首を傾げる。

曹操「ええ、北郷からの情報で、あの者は未確認生命体第4号と言
うそうよ、そしてその4号も天から来た者らしいわ」

楽進「4…号……」

曹操「それで、何かしら」

楽進「はっ、はい、実は私……以前に、その4号と会った事がある
んです」

曹操「何……？」

それから楽進は雄介の村での出来事は話した。

曹操「なるほど……クウガ……」

楽進「はい」

曹操「それは五代からの情報なのね」

楽進「はい」

曹操「……五代をここに」

楽進「分かりました」

楽進は雄介を探しに外に出る。

しかし、楽進が雄介を連れて戻って来ることは無かった。

――虎牢関――

雄介「……………」

陳宮「……………」

連合軍がクウガの出現に騒いでいる頃、虎牢関では雄介と陳宮が向かい合っていた。

雄介「あの――……」

黙っていた二人だったが雄介が口を開いた。

陳宮「何ですか？」

雄介「何で俺……縛られてるの？」

雄介の言う通り雄介はガッチリと縄で縛られ椅子に座っていた。

陳宮「……恋殿を救って頂いたのは感謝します、ありがとうございますので
す」

そう言っ頭を下げる陳宮

雄介「いや……そんな……」

陳宮「しかし！それとこれは違うのです！奇怪な術を使う妖術使い
を野ざらしには出来ないのです！」

雄介「ええええ……」

恋を助けた雄介、城壁に飛ぶと変身を解き恋に顔を見せる。

恋もいきなり雄介の姿が変わったので驚くがすぐに笑顔になる。

近くの兵士に治療を頼み、ふと振り返ると陳宮と目が合う。声をかけようとしたが陳宮が「捕らえるのです！」と言う方が早く、気付いた時には縛られ、今に至る。

雄介「いや！俺妖術使いとかじゃないから！」

陳宮「ではあの時の姿は何ですか？妙な鎧を着ていると思えば瞬時に消え、あの人間とは思えぬ跳躍！妖術使いでなければ何なのか！？」

雄介「えっと…その…あの姿はクウガって言って…そう！戦士！皆を守る戦士！」

陳宮「……………」

勢いよく答える雄介、対し陳宮は「は？」と言いたげな表情

雄介「……………」

陳宮「はあ…………仕方ないのです、恋殿を救ったのは事実、言い方はおかしいですがそれに免じて縄は解いてやるです」そう言って雄介の縄を解く陳宮

雄介「……………」ありがとう♪」

陳宮「ふん」

雄介「ところで陳宮ちゃん……………」

陳宮「陳宮ちゃんですと？」

雄介に「陳宮ちゃん」と呼ばれ眉を歪ませる陳宮

雄介「えっ…あつ、すいま…」

今になって軍人にちゃん付けはまずかったかと思う雄介、直ぐに謝罪しようとする。

陳宮「音々音」

雄介「え？」

陳宮「ねねの真名なのです」

雄介「真名って…いいの？」

音々音「駄目です」

雄介「えええ！？」

音々音「しかし、許すのです」

雄介「どっちなの！？」

音々音「これは例外中の例外です！不本意ながら、非つつつじょおとおおおに！不本意ながら！ねねの真名を呼ぶ事を許可するのです！！！」

雄介「……………」

音々音「何ですか？」

雄介「……………はは♪」

音々音「何故笑う!？」

雄介「いや、何でもないよ、ありがとう音々音ちゃん、俺は五代雄介、字は凜人、真名は訳あって無いけれど、よろしく」

音々音「むう…何だか気に入りませんが…よろしくなのです、あと、ねねのことはねねでいいのです」

雄介「うん♪」

少し膨れっ面の音々音に対し笑顔の雄介、過程は妙なものであるが無事、友好?を結べたのであった。

第二十四話

―虎牢関―

音々音「戦を止めたいですと？」

雄介「うん」

何とか打ち解けた雄介と音々音、日が落ち、食事をしていた時、雄介は己の心の内を伝える。

音々音「何を馬鹿な……」

雄介「俺は本気だよ」

音々音「む……」

否定した音々音だが雄介の真剣な目にたじろぐ。

クウガの力を再び得た雄介、何とかこの力を役立てれないかと考えていた。

自分でも色々思案したのだが良い案も浮かばず音々音に相談したのだ。

音々音「……………」

雄介「どう…かな？」

音々音「無い…ことも無いのです」

雄介「本当!？」

音々音「ええ…：雄介は董卓様を知っていますよね」

雄介「うん」

音々音「先に言っておきます、董卓様の世評は全て嘘です」

雄介「え? そうなの？」

戦が始まる前から聞いていた噂、現代の知識からも、雄介は董卓のことをあまり良くは思っていなかった。

しかし、音々音から聞かされた事実に驚く。

音々音「董卓様は民をいの一番に考えるお方なのです、決して噂のような人では無いのです…：全ては何進や十常侍達が悪いのです」

そして聞かされる、権力争いに巻き込まれた少女の事実

話を聞いた雄介は胸を痛める。

音々音「董卓様は今奴らに睨まれ自由に動けません、ねね達は董卓様が目を付けられているため逆らえず戦っています…：ねね達は董卓様が解放されれば戦う意味がありません、そこで雄介、お前には董卓様を救い出してほしいのです」

雄介「董卓さんを…：」

音々音「はい、お前のあの力を見込んでなのです」

雄介「……………分かった」

音々音「雄介……………ありがとうございます」

音々音は雄介が頷いてくれたことに安堵する。

詳しい話は恋や他の將軍を交え翌日にし、その日は休む事になった。

第二十五話

雄介「……………」

洛陽への道中、雄介は案内役の背中を追いながら無言で馬を走らせる。

案内役が気まずさを感じるなか、雄介は出発前の話し合いを反芻していた。

音々音「いいですか？洛陽には内通者が僅かながらいます、密かに連絡を取り、救出の際に騒ぎを起こすよう指示するので雄介には混乱に乗じて董卓様を救出してもらいます」

雄介「うん」

音々音「救出後は直ちにこちらまで下がってください、ねね達は籠城に移るので迅速にお願いします」

雄介「分かった」

音々音「では武運を祈ります」

とにかく『素早く』、それだけだ。

案内役「見えました」

ようやく洛陽が見える位置にまで来た。

案内役は虎牢関潜入を報告しに戻るため、ここからは一人で洛陽に向かう。

雄介「すう……はぁ……よし……変身!!」

途中で馬を降り、一旦深呼吸をしてクウガに変身する。

クウガ「超変身!!」

さらにクウガドラゴンフォームに超変身する。

すでに洛陽からは煙が上がっており、喧騒が聴こえる。

クウガDF「はぁっ!!」

董卓救出のためクウガDFは洛陽に乗り込む。

――虎牢関――

籠城を決め込んだ恋達、しかし連合軍も様子を見ているのか睨み合
いが続いていた。

音々音「ふむ……中々動きませんね、こちらとしては好都合ですが」

「軍師殿、いいか？」

音々音が連合軍の様子を確認していると將軍の若い男が話しかけて
きた。

音々音「何ですか？」

「少し気になったんだが……五代と言ったか？あいつはお嬢の顔や
ら居場所やは分かっているのか？」

音々音「は……？」

將軍の言葉に固まる音々音

「いや、どうもそのような会話をしていない気がしたんだが……」

將軍にそう言われ音々音の体がプルプルと震える。

音々音「し……し……し……」

「し？」

音々音「しまったあああああああ！！」

突然の大声に周りの兵士が一斉に振り返る。

音々音「あああいつがによ…妙に打ち解けていたのですっかり忘れていたのです！す…直ぐに早馬を！」

「落ち着け軍師殿」

慌てる音々音を將軍はなだめる。

音々音「しかしですね！よくよく考えれば雄介を月殿が信じるかどうか怪しいのです！ああ！なんて浅はかだったのですか！！」

音々音は頭を抱え振り乱す。

「だから落ち着け………兵士に行かせるのも無茶だろう………仕方ない、俺が行こう」

音々音「こ…紅紫士殿」

紅紫士「ふっ」

紅紫士こうしと呼ばれた將軍は不敵に笑うと颯爽と馬屋に向かう。

紅紫士は父の代から董家に仕える武将である。

董卓とも幼少の頃からの付き合いで紅紫士は董卓をお嬢と呼び慕っている。

今回の戦が決まった際は血が流れるくらいに壁を殴り、悔しんだほどだ。

紅紫士「さて…余所者にいい所取られんのはシャクだからなあ……
ハアッ！」

馬に乗り、洛陽の方を見据える紅紫士、静かに呟くと勢いよく馬を走らせる。

向かうは洛陽だ。

――洛陽――

洛陽では内通者により、いたる所で火が起こり兵士達は消化活動のため奔走していた。

洛陽に潜入した雄介はクウガの姿ではあまりにも目立ち過ぎるため変身を解き、路地裏に身を潜めていた。

路地を見渡し兵士がいないのを確認するとその場から城を見つめる。

雄介「よし！」

雄介は活を入れなおし、城に向かう。

この時、雄介には城に行くことしか頭になかった……

第二十六話

―洛陽―

兵士の目を掻い潜り、城に侵入した雄介、そのまま董卓の所に向かおうとしたのだが……

雄介「迷った……」

初めて入った城、さらには兵士に出会わないように動いていたため、雄介はすっかり迷っていた。

雄介「失敗したな……ねねちゃんに聞いておけばよかった」

雄介は事前に確認しておかなかった事を後悔する、どうしようかと悩んでいると誰かがやって来る気配を感じる。

おっぴ……
雄介

こんな所で見つかる訳にはいかないのだから静かに移動する、結果董卓がいる場所からは遠ざかってしまうのだが……

―虎牢関―

既に虎牢関では戦闘が始まっていた。

初めは攻めあぐねていた連合軍だが、痺れを切らした袁紹が攻撃を命じたのだ。

諸侯はあまり戦を長引かせたくないため戦闘に集中していたが曹操や孫策、一刀と言った者は別の事に思考が寄っていた。

曹操「五代……」

曹操はいつも明るく笑っていた下男を思い浮かべる。

楽進からクウガについての情報を聞き、楽進や狼乾等に雄介を探させた。

しかし、虎牢関にいる雄介を見つけることは出来なかった。

突如現れたクウガ、突然消えた雄介、クウガについて何かを知っていると思われる雄介が消えたことは曹操にとりよめの無い疑問を抱かせる。

一刀「何で4号がここに……」

元いた世界で未確認生命体と同士討ちをしていた4号——というのは事実を知らない人間の誤解だが、一般人であった一刀には知るよ

しもないのは仕方がない。

一刀に分かっているのは人類の脅威であったグロンギを滅ぼすほどの力があるという事だけ。

この世界に現れた、人では無い存在―クウガ―4号は一刀の畏怖の対象でしかなかった。

孫策「まさかねえ……」

孫策は悩む、クウガを遠目ながら見て以来、何か引つかかるものがあるのだ。

普通戦場にいれば殺気、もしくは恐怖や憎悪といった何かを感じる。

だがクウガからはそういったものは感じず、強いて挙げるならば悲哀である。

しかし、それ以上に気になる事がある。クウガから感じた感覚がいつか出会った青年と似ているのだ。

孫策「いや…まさかねえ……」

久しぶりに自分の勘を疑う孫策であった。

—洛陽—

雄介「まずい、急がないと……」

雄介は焦っていた。

雄介が侵入する際に内通者が起こした騒ぎが次第に沈静化しているのだ。

騒ぎが収まれば城にも兵士が戻って来る。

そうなれば自由に動くこともままならない。

これでは董卓を探すことが出来ない。

雄介「どうすれば………」

「おい、お前」

雄介「つつ!?!」

物陰から辺りを伺っていた雄介、しかし背後から声をかけられ飛び上がる。

「静かにしろ!」

雄介「んう!?!」

驚きのあまり声をあげようとしたが口を押さえられる。

雄介「んううう!!」

口を押さえられと同時に体も押さえつけられたので振りほどこうと暴れる。

「落ち着け!俺は味方だ!」

雄介「んう?」

味方と言われ雄介は暴れるのを止める。

落ち着いたことで解放され、相手をよく見ると、どこかで見た――
と言うより数時間前に見た顔だった。

雄介「あれ?あなたは……」

紅紫士「紅紫士だ」

雄介を押さえつけていたのは紅紫士だった。

雄介への説明不足に気付き、ここまでやって来たのだ。

雄介「どうしてここに?」

紅紫士「いや、軍師殿がうっかりしていてな、お前に場所の説明し

てなかったろ」

雄介「……はい」

紅紫士「俺が案内する、着いてこい」

雄介「はい！」

走り出す紅紫士に続いて雄介も走り出した。

―洛陽・某所―

「月……」

「詠ちゃん……」

洛陽某所で二人の少女が向き合っていた。

月と呼ばれた少女は酷くやつれ、詠と呼ばれた少女は悲痛な表情を浮かべていた。

月と呼ばれた少女、彼女こそある意味今回の戦いの中心人物、董卓だ。

虚ろな目の董卓の手には小刀が握られていた。

董卓「詠ちゃん…私がいるから駄目なのかな？」

そう言って董卓は小刀を撫でる。

「考えなおそうよ月！」

董卓の思惑を知ってかそれを止めさせようとするのは董卓の幼なじみの賈馱。

董卓「詠ちゃん……」

しかし、董卓はそれに答えようとはしない。既に同じ論議が何度もされているのだ。

董卓「詠ちゃん……私、私……！」

賈馱「月……待って」

賈馱はそう言うのと棚に置いてあった小刀を取る。

董卓「詠…ちゃん」

賈馱「月を……一人にはさせない」

今回の戦による重圧に押し潰されそうな董卓、遂に耐えきれなくなった彼女は己を断ち切る小刀を手にとったのだ。

そして賈馱も大切な親友の苦しみを共に背負うとする。

賈馱「月……………」

董卓「詠ちゃん……………」

二人は互いを抱き合う。

董卓「詠ちゃん！」

賈馱「月！」

最後に互いの名前を呼び合い小刀を握りしめたその時

「董卓さん！」

「お嬢っ！」

勢いよく部屋の扉が開かれた。

第二十七話

洛陽に侵入した雄介、しかし、道に迷ってしまう。

そんな所に紅紫士が合流し、共に董卓の元に向かうのだが……

紅紫士「急げ!!」

雄介「はいっ!」

兵士「侵入者だ! 追え!!」

兵士「待てえ!!」

二人は絶賛逃走中であつた。

董卓の元に向かっていた雄介と紅紫士、しかしその道中で兵士に見つかってしまう。

場違いな庶人の服を着ている雄介に加え、董卓派の紅紫士

董卓をよく見ていない者には邪魔者でしかない。

ましてや董卓と董卓派の者達を引き離すために董卓を軟禁しているのだ。

このような所においては排除の選択肢を選ぶ他ない。

紅紫士「この先を右だ！」

無駄な戦闘をしないように追手を撒きながら董卓を目指す。

紅紫士「そこだ！五代！その部屋だ！！」

紅紫士が指差す部屋に雄介が飛び込む。

雄介「董卓さん！！」

紅紫士「お嬢っ！！」

続いて紅紫士も部屋に入る。

賈馱「だっ！誰！？」

董卓「紅君！？」

突然入ってきた二人に董卓と賈馱は驚く。

紅紫士「お嬢……」

雄介「紅紫士さん！」

紅紫士「…ああ！」

董卓の無事を確認した二人、一息つく間もなく急いで扉の前に机や棚等でバリケードを組み立てる。

雄介「これならしばらくは大丈夫」

紅紫士「ああ」

董卓「あ…あの……」

バリケードを組み立て終わると董卓がおずおずと声をかけてきた。

紅紫士「お嬢、御無事でなにより」

董卓「紅君……」

雄介「紅紫士さん……」

紅紫士「ん？ああ、こちらが董卓様だ」

董卓「あの……あなたは……」

雄介「あ、俺は……恋ちゃんとなねちゃんの友達の五代雄介です」

董卓「恋さんとねねさんの……」

紅紫士「と、暢気に自己紹介している場合じゃ……お嬢、それは……」

自分達の状況を思い出し、用件を伝えようとする紅紫士、しかし、董卓と賈馱の手に握られた小刀に気づく。

董卓「こ…これは…」

指摘された董卓の体が跳ねる。

紅紫士「何を…っ！まさか！？お嬢！！」

董卓「来ないで！！」

董卓の思惑に気付いた紅紫士は小刀を奪おうとする。

しかし、董卓は紅紫士が奪うより早く小刀を自身の喉に突き付ける。

紅紫士「おっ…お嬢…」

董卓「わ…私は…私は！！」

董卓の手が震える。

紅紫士は董卓の気迫に動けないでいた。

雄介「君は…何を…しているの？」

その声は非常に落ち着いていた。

紅紫士「五代…」

紅紫士は雄介の顔を見る。

董卓「五代…さん…」

雄介「君は何をしているの？」

雄介は再び尋ねる。

董卓「私は…私はもう耐えられません！苦しいんです…辛いんです！！！」

雄介「…だから…死ぬの？」

董卓「っ！…私には…どうしようも出来ません…私がいなければこんな事も起こらなかったのかも…私に武はありません、知も特別に秀でている訳でも…だからせめてもの償いを…！！！」

雄介「逃げるんだ」

董卓「に…逃げる…」

雄介「君は嫌な事から逃げてるんだ」

董卓「わ…私は…」

紅紫士「五代！！」

始めは呆気にとられた紅紫士だったが雄介の物言いを咎める。

五代「そうだろ？」

しかし、雄介はそれを見做す。

董卓「…たに…あなたに…あなたに！何が分かるんですか！！」

雄介の言葉に董卓は興奮して声を荒げる。

雄介「分かるよ」

董卓「っ…何が…！」

雄介「俺も…俺も同じだったから…理由を付けて嫌な事から逃げてたから」

董卓「……さい……」

雄介「………」

董卓「…るさい…うるさい……うるさい…うるさい…うるさい！！うるさい！！うるさい！！」

賈馱「月……」

董卓「私にはもう生きる意味がないんです！この戦はおそらく私達の負け…戦が終われば待っているのは死刑、そうでなくても大罪者として一生の目も見えない扱い……私は…私はもう！！」

雄介「生きろよ」

董卓「っ！」

雄介「生きる……生きるよっ!! 死んで責任を取る? そんなのは責任じゃない! ただ逃げてるだけだ! 責任取るんだったら生きる! 生きて償い続けるんだ! 陰口叩かれて、石投げられて、泥水すすって木の根かじって、ぐちゃぐちゃになってボロボロになって、立ち直れないくらいに叩きのめされて!!……生きるんだよ! 生きればいいんだ!!」

董卓「…分からないんです……そこまでしてっ! 生きる意味が分からないんです!!」

賈馱「月!!」

紅紫士「お嬢っ!!」

雄介の説得を聞いた董卓、しかしそれに逆上したのかそう言って小刀を喉に突き刺そうとした。

雄介「……………」

董卓「…な…何を!？」

しかし小刀が喉を突くことはなかった……雄介の手によって。

雄介「痛う……」

雄介は痛みも、血が流れることも気にせず剥き出しの刃を握りしめ董卓の行為を阻止した。

董卓「いけない!」

董卓は小刀を捨て手拭いで雄介の手を縛る。

雄介「……優しいんだね」

董卓「え？」

雄介の言葉に董卓の動きが止まる。

雄介「今死のうとしてたのに、怪我した俺を心配してくれた」

董卓「……………」

雄介「君は生きる意味が分からないって言ったよね」

董卓「……………」

雄介「やりたいこと無いの？皆と遊んだり、美味しいもの食べたり、恋愛したり」

董卓「……分かりま……せん」

董卓はそう言い顔を伏せる。

雄介「だったら……俺が考える」

董卓「……………え？」

雄介「自分で分からないなら俺が探す、決めてあげる……駄目……かな？」

董卓「それは……………」

雄介「例えそれが気に入らなくても、君が納得する理由を一生探す、探し続ける…だから君に生きてほしい」

董卓「私は……」

雄介「だから……死ぬなんて……言っちゃ駄目なんだ」
董卓「……………」

賈馱「月……」

董卓「詠ちゃん……」

賈馱が董卓の手を取る。

すると董卓の頬を涙が流れる。

董卓「詠……ちゃん」

賈馱「うん」

董卓「詠……ちゃん…グスッ…ヒッ…」

涙を我慢するように嗚咽する董卓

賈馱「月、いいよ」

賈馱はそんな董卓を抱きしめる。

董卓「詠…ちゃんヒッうつ…うわあああああああああ！！」

それが境に董卓は声を出して鳴き始めた。

賈馱「月……月!!」

賈馱も董卓につられ、涙を流す。

紅紫士「五代……ありがとう」

二人の様子を見ていた紅紫士は雄介に頭をさげ礼を言う。

雄介「いえ、そんな……俺は……」

そこまで言った所で部屋の外の喧騒が大きくなる。

紅紫士「チッ、まずいな、どうやって脱出するか」

雄介「あ、大丈夫ですよ」

紅紫士「は……?」

董卓「へうううううううううう!!」

賈馱「きゃあああああああ!!」

紅紫士「ぬうおおおおおおお!!」

クウガDF「はっ！」

城から脱出した四人は洛陽の上空を飛んでいた。

クウガDFに変身した雄介は両脇に董卓と賈馱を抱え、紅紫士を背負い窓から飛び出した。

クウガDFの跳躍力を活かし、とんでもない高さまで飛ぶので三人は常に叫びっぱなしであった。

董卓「「「いやあああああああ!!」」」

第二十八話

曹操「……………」

雄介「……………」

洛陽に設置された曹操軍の天幕、その中で雄介と曹操は口を閉ざし、向かい合っていた。

但し、雄介の手足には鉄製の枷が付けられて……………

時間は遡り董卓の救出の後

董卓と賈馱を救出した雄介と紅紫土、城を脱出し、賈馱の指示で董卓と縁が深い商家に身を隠した。

董卓「傷……治るの早いですね」

雄介「うん、これもクウガの力なんだ」

雄介の包帯を自ら取り替える董卓、これは雄介を傷つけた董卓の責

任の念からだ。」

ちなみに三人にはクウガの力を説明している。脱出した後、賈馱に問い詰められたためである。

雄介「ありがとう」

そう言ってニツコリと微笑む雄介

董卓「は…はい……」

対し董卓は顔を少し赤らめる。どうも説得の際に雄介が放った言葉を後から思い返すと、一種のプロポーズのように取れたらしく、初な彼女は少しながら雄介を意識してしまっているのだ。

これに賈馱と紅紫士はいい顔が出来ない。

大切な幼なじみで、命をかけて仕える主君がぽっと出の男に気を引かれていたのだ。

二人には面白くないだろう。

兵士「失礼します」

紅紫士「どうした？」

やって来たのは紅紫士の部下の諜報、紅紫士達に情報を流すため、民に扮している。

兵士「虎牢関、連合軍により制圧、呂布將軍、陳宮様は連合軍に降伏されました。数日以内に連合軍は洛陽に到着するかと」

紅紫士「そうか…分かった、下がっていいぞ」

兵士「はっ！」

虎牢関が落とされたのは音々音の計画通りだった。

董卓の身柄さえ確保すれば無駄な被害を出さない内に降伏し、連合軍に洛陽を攻めてもらい、汚職にまみれた要人等を始末させるのだ。

既に呂布、張遼と言った武将や賈馱、音々音のような軍師もいないため洛陽にはろくな戦力が無い。
洛陽攻略は簡単にすむであろう。

賈馱「これで民も……」

董卓「うん……」

ようやく悪政に苦しむ民が解放される事に董卓と賈馱は安堵する。

それから数日後、洛陽は連合軍により制圧された。

街の復興が始まったある日

楽進「……………」

楽進は兵士に指示をしながら共に家屋の補強用の資材を運ぶ。

そうしながらも注意を常に周囲に払っている。

曹操は主要な武将にある命令を下していた。

その命令とは五代雄介の捕獲だ。

確信しきれない確信、雄介Ⅱクウガかもしれないという考えに至った曹操、彼女は例にもなく焦っていた。

あの強大な存在――クウガ、これ以上不確かにはしておくにはあまりにも危険だと。

故に雄介捕獲の命令を下したのだが、如何せんほとんどの者が雄介の存在を知らない。

知っていてもせいぜい曹操の茶汲み程度にしか思っていないので印象には残っていない。

実質、雄介搜索に動けるのは楽進と狼乾、その他数名である。

雄介「木材持って来ました！」

男「おう！」

楽進達が雄介を探す中、雄介は街の復興を手伝っていた。

商家で身を潜めていた雄介、街の復興が始まってからはじっとしていられず、紅紫士から止められるも強引に外に出る。

それからしばらく部屋に籠っていた反動か、手当たり次第に復興を手伝い、良い汗を流していた。

男「兄ちゃん、さっきから動きっぱなしだぜ、あんま根つめんなよ？」

先ほどからよく働く雄介に感心してか男衆が声をかける。

雄介「大丈夫です！体力には自信ありますから！」

男「そうかい？なら俺も負けてられねえな！」

雄介の明るさに当てられ男も気合いを入れ直す。

その様子を見て周りも明るくなる。

「雄介！！」

雄介「え？ろ…狼乾……」

狼乾「ああ……」

作業を再開しようとした矢先、誰かに声をかけられる。
振り向くとそこには狼乾がいた。

雄介「……………」

狼乾「……………」

二人の間に気まずい空気が流れる。

狼乾「……来い、曹操様が呼んでる」

先に口を開いたのは狼乾だった。

雄介「……………うん……………皆さん、すみませんちょっと抜けます」

雄介は素直に頷き他の人達に断りを入れてから狼乾の後を追う。

後には状況が理解出来ず、呆ける人達が残された。

その後、天幕に連れていかれた雄介、天幕に入るとすぐさま手足に枷を付けられ、冒頭に至る。

雄介「……………」

曹操「……………回りくどいのは嫌いだ、だから単刀直入に聞く……………
五代雄介、お前が4号……………クウガか？」

曹操の言葉に雄介は覚悟を決める。

雄介「はい、俺が……俺がクウガです」

第二十九話

雄介「俺が……俺がクウガです」

目の前の男——五代がそう答えた。

その言葉に裏は感じられない。

疑問が確信に変わった気がする。

何故？

信じられるからだ。

そう思えるほどこの男の言葉は真っ直ぐで、頷けるほどこの男の目は澄んでいる。

しかし、その言葉をただ信じる訳にはいかない。

曹操「……………五代」

曹操「……………五代」

雄介「……………」

曹操に自分がクウガであることを告白した雄介、じつと曹操の言葉の続きを待つ。

曹操「……………この事については城に戻り追求する」

雄介「……………はい」

戦が終わった直後で復旧作業が忙しく、他の勢力がいる中で不用意な行動は取りたくない。

それ故の発言だった。

曹操「撤収するまでは大人しくしておけ、もし脱走などした場合には……………分かっているな」

雄介「はい」

脱走する気など端から無いので雄介は素直に答える。

その後は天幕に監禁され、撤収の日を待つ。

―曹操軍撤収の日―

紅紫士「結局：戻って来ませんでしたね」

窓側の壁にもたれながら、横目で外の往来を眺める紅紫士

董卓「そう……ですね」

紅紫士の言葉に董卓は顔を曇らせる。

賈馱「密偵の知らせだと曹操の所に戻ったみたいだけど」

董卓「……まだ……何もお返し出来てないのに……」

雄介に命を救われた董卓、感謝の意を示しきれていないと後悔の念が残っていた。

紅紫士「まああいつのことです、野垂れ死ぬことは無いでしょう、その内また会えますよ」

董卓「……そうですね」

少しながら明るくなる董卓

賈馱「さてと、そろそろ今後の方針を決めましょう」

紅紫士「そうだな」

そう言ってこれからについて意見を出し合う賈馱と紅紫士

賈馱「――」

紅紫士「――」？

二人の話を聞きながら空を仰ぐ董卓、澄みきった青空に目を細めながら静かに呟く。

董卓「雄介さん……また、いつか……」

雄介「……………」

玉座の間、雄介はそこにいた。

城に戻った雄介は数日の間牢屋に幽閉された後、洛陽での続きをすると曹操に呼ばれたのだ。

情報漏洩を防ぐ為、兵士は一人もおらず、雄介はもしもの時の為に武器を構えている主要幹部に囲まれている。

李典（なあ、沙和……）

于禁（どうしたの？）

李典（あんな男相手にこの面子って……過剰戦力ちゃうか？）

雄介を囲んでいる武将達を見て顔をひきつらせながら小声で告げる。

于禁（そんなの沙和に聞かれてもー）

雄介がクウガという情報は誰にも知らされておらず、この状況を理解できているのは雄介と曹操だけ。そのため、武器を構えていても内心気が緩んでいる者ばかりだ。

例外はクウガの正体を知っている曹操と理由が分からずとも曹操に忠実な夏侯惇、夏侯淵、そして以前より雄介を警戒している楽進

許緒（あの兄ちゃん何したのかな？）

……
典章

この面子の中でも比較的面識のある典韋は不安げに雄介を見つめる。

曹操「……では……審問を始める」

雄介「……………はい」

「……………」

曹操「まず……お前は私の味方か、敵か？」

曹操の言葉に少し考え……

雄介「……もし……もし、貴女が意味も無く……人を傷つけるなら……俺は貴女の敵になります」

夏侯惇「貴様っ!？」

曹操「春蘭、やめなさい」

夏侯惇は雄介の発言を曹操への侮辱と取り斬りかかろうとする。
しかし、曹操に止められた。

夏侯惇「かっ……華琳様!？しかし……」

曹操「二度は言わないわ」

夏侯惇「……はい」

曹操「いい子ね……それで五代、お前には私がそのような愚か者に見えるのか」

雄介「いえそのようなことは……あくまで、もしも…仮定の話です」

曹操「では私が意味も無く民を傷つけるなら敵対は免れないと？」

雄介「そう…なります」

曹操「五代、この曹孟徳を例え仮定であろうと疑ったこと、恥だと思いなさい」

雄介「……はい」

曹操「次に、お前が4号であるという証拠……見せなさい」

夏侯惇「4号……!？」

楽進「……………」

「「!？」」

4号、その名前は全員知っている。
虎牢関の戦いで突如現れた謎の戦士
まさかこの男が？と全員が身構える。

雄介「……待ってください！なんでその名前を！？」

未確認生命体4号、それは雄介の元いた世界で警視庁が定めたクウガの名称、メディア等で報道されたことはある。この世界に来てクウガの名前を言ったこともあるが4号と言ったことは無い。

つまりは4号と言う名前を曹操が知っているはずがないのだ。

曹操「それは北郷からの情報だ」

雄介「北郷……天の御遣い」

これで確信した。

北郷一刀は元いた世界、雄介の世界の人間だと。

雄介「……………」

曹操「どうなの？もし出来なければ虚言を言い、世を乱そうとした罪で処罰するわよ」

雄介「……………分かりました、証拠を見せます……………この枷を外していただけますか？」

曹操「……秋蘭」

夏侯淵「……………はっ」

一瞬、躊躇するが夏侯淵は雄介の枷を外す。

雄介「ふう……………行きます、……………っ！」

「「「!？」」」

突然雄介の腹部から出現したアークルに全員が驚く。

雄介「……………っ！」

左手をアークルに添え、右手を左前方に突き出す。

そしてゆっくり右手を右前方に動かし、左手をアークルの左側に添える。

雄介「ふう……………」

そして一度深呼吸をしてあの言葉を口にする。

雄介「変身!!」

次の瞬間、雄介の姿は心優しき戦士——仮面ライダークウガに変わった。

雄介がクウガに変身したことでその場にいる——曹操を除く——全員が再び武器を構える。

曹操「全員落ち着きなさい!!」

しかし、曹操がそれを制す。

クウガ「……これが……俺の力……クウガです」

夏侯惇達が落ち着くとクウガが己の名を告げる。

夏侯惇「戻った……!?!」

雄介「……………」

いつまでもクウガに変身している訳にはいけないので雄介は変身を解く。

雄介「俺は、天の御遣いと同じ世界の人間です……………」

それから雄介は自分の正体について全てを話した。

自分が天、別の世界から来たこと。

自分が元の世界で旅をしていたこと。

ある日、一人の男と出会ったこと。

みんなの笑顔を守る為に闘う決意をしたこと。

その闘いの中、色々な人に支えられたこと。

最強の相手と闘ったこと。

この世界で恩人と出会ったこと。

大切な友と恩人を失ったこと。

初めて人を殺めたこと。

再び、誰かの笑顔を守ると決意したこと。

途中、その時のことを思い出し、言葉が詰まりそうになるが最後まで全てを打ち明けた。

雄介「……………以上です」

雄介の話が終わると、まるで夢物語を聞かされたような者、共感し同情から顔を伏せる者、あまり理解できていない者、信じられず怪訝そうにしている者に別れた。

曹操「その話、嘘偽りはあるか？」

その中で曹操は毅然とした態度で雄介に尋ねる。

雄介「ありません」

同じく雄介も堂々と返す。

雄介「……………」

曹操「……………」

二人は互いに目を見つめ合う。何かを確かめるように。

雄介の目に以前感じた闇は見受けられない。
あるのは信念に燃える炎だけだ。

曹操「…………ふふ」

不意に曹操が笑みをこぼす。まるで新しい娯楽を見つけたように。

曹操「五代雄介、お前は今の世を憂いている、そうか？」

雄介「はい」

曹操「私にはこの世を正す力があると思うか？」

雄介「……はい」

曹操「ならば私に力を貸しなさい！曹孟徳！いずれこの大陸に覇道を示す私に！！」

雄介「っ！？」

曹操の自信と純粋な覇気に圧倒される雄介

しばし考える。

この人について行けばみんなの笑顔を守ることが出来るのかと。

そんなことは分からない。

未来の事などクウガの力でも分からない。

ならば賭けるか

この少女に

この覇王に

雄介「俺は……俺は五代雄介凜人！戦士クウガ！！」

雄介は宣言する。

雄介「俺はみんなの笑顔を守る！！」

曹操「ならば私に従いなさい！！」

雄介「はい！！」

この瞬間、覇王と心優しき戦士が手を組んだ。

世を正す為に。

第二十九話（後書き）

雄介、と言うか中の人……メンドイからオダギリさん、戦争物に出てたんですね。

いや別に、だから？と言うわけではありませんが。

何となくね

第三十話

曹操による審問の翌日

雄介「……………」

光翔「……………」

「……………」

食堂に訪れた雄介は光翔や同僚達によって、審問の時さながらに囲まれ正座をしていた。

光翔「さあて、何か言うことは？」

にこやかな光翔、しかし目は一切笑っていなかった。

雄介「あはは……………」

対し雄介は苦笑いをするばかりだ。

光翔「まったく……………帰ってきたと思ったら牢に入れられて、出てきたと思えばなにもなかったみたい、どれだけ俺達が心配したと」

「「うんうん」」

光翔の言葉に雄介以外の全員が頷く。

雄介「えっと…細かいことは今度………」

雄介の今後の処遇については曹操達が話し合い、後日伝えられる事になっている。

光翔「…………お前がそう言うならそつとしておくよ」

雄介「光翔さん…皆……ありがとうございます」

雄介を信頼し、光翔達はそれ以上の追求はしなかった。

光翔「それに、待ってる人もいるみたいだしね」

雄介「え？」

光翔「後ろ」

張遼「ヤッホー」

恋「……………」

音々音「お久しぶりなのです」

光翔にそう言われ雄介は後ろを振り返る。

そこにはいつの間にか張遼に恋、音々音がいた。

雄介「恋ちゃんにねねちゃん!？」

まさかいるはずの無い恋と音々音がいることに雄介は驚く。

雄介「なんでここに!？」

張遼「ううん…説明はしたるからちよい待ちい、ちよつと雄介借りんで」

光翔「はい、構いませんよ、さあ俺達は仕事だー」

((雄介、許すまじ……))

十人見れば十人が美人と答える張遼や恋と仲の良い雄介を見て妙な殺気を発する野郎共、そしてそれを抑える光翔(嫁持ち)

そんな彼らを気にしながら雄介は張遼達に付いていく。

雄介が連れて来られたのは張遼の自室、軽く辺りを見渡してから張遼は話を始める。

張遼「んじゃ、まずは……雄介、ありがとう」

佇まいを直し、張遼は雄介に頭を下げる。

雄介「張遼様!？」

突然頭を下げられ驚く雄介

張遼はそのまま続ける。

張遼「恋やねねだけやなく、月に詠も助けてくれた、感謝してもしきれん本当にありがとう」

恋「雄介……ありがとう」

音々音「ねねも礼を言うのです」

張遼に続いて恋と音々音も感謝を告げる。

雄介「……俺が助けたかったから助けたんです、だから頭を上げてください」

張遼「雄介……ホンマにありがとう!!」

雄介「うわっ!？」

頭を上げた張遼は雄介の顔を見ると満面の笑顔を浮かべて雄介に飛び付いた。

雄介「張遼様!？」

首に腕を回して抱き着いて来たので戸惑う雄介

張遼「霞」

雄介「え？それって……」

張遼「ウチの真名や、これは礼やない、アンタを認めたから真名を預けるんや」

雄介「……………分かりました、霞様」

霞「いやいや、呼び捨てでカマンテ」

雄介「……………うん、霞」

霞「それでよし」

雄介が自身の真名を呼び満足したのか霞は雄介から離れる。

霞「それで？」

雄介「？」

霞「いや、首傾げんなや、真名や真名、雄介の真名教えてくれへんの？」

雄介「……………あゝ」

雄介はすっかり忘れていたが真名とは命と等しく大切な物、真名を許されて同じように返さないということはこの上なく失礼なことだ

ある。

雄介「（そう言えばあの時は三人共いなかったな）実は……………」

霞「別の……」

音々音「世界……」

恋「……………?」

雄介「うん」

粗方の説明を終えた雄介、やはりと言うべきか三人は半信半疑な表情

霞「つまりは真名が無いっちゅうことやろ」

雄介「まあ簡単に言えば」

霞「ならええわ、前列もあるし、雄介が訳の分からん人間でも仲間には変わり無いんやし」

恋「……………」コクッ

音々音「むう、色々と気になりますが……」

雄介「あはは……それよりさ、ちょっと聞きたいんだけど」

音々音「何ですか？」

雄介「霞さんは分かるけど恋ちゃんとねねちゃんは どうしてここに？」

食堂で出会ってから浮かんでいた疑問をやっと口にする。

音々音「ああ、それはですね、降伏した時に恋殿とどうするか相談したら、どうせ行くなら雄介のいる曹操の所に行こうと恋殿がおっしゃいました」

恋「……………」コクッ

雄介「そうなんだ、いるなんて思わなかったからビックリしたよ」

霞「せやせや、ビックリした言うたらなんやつけ？クウガ？なんか凄いモンになるらしいな」

強いと言う情報しか聞いていないため、疑問よりも興味の方が大きく、目をキラキラさせていた。

霞「なあなあ、見せてえな」

雄介「えっと……また今度ってことで……俺仕事あるから！」

クウガへの変身を催促されるが、前の世界での実験でも証明でも無いので極力変身を避けたい雄介は適当にはぐらかし仕事に戻った。

霞「あつ雄介……チェツ……」

音々音「まあまあ」

恋「嫌がること……ダメ」

残念がる霞に静かに諭す恋と音々音であった。

雄介「つ……疲れたあ」

その日の夜、仕事を終えた雄介は城で働く者の宿舎に戻り寝台に倒れこむ。

狼乾「おいおい、大丈夫か？」

同室の狼乾が苦笑いで声をかける。既に自分の素性については説明してあるので普通に接してくれている。

ちなみに部屋は四人部屋なのだが、今のところ雄介と狼乾の二人だけの部屋になっている。

雄介「俺……もう寝るから」

あの後仕事に戻った雄介、しかしその先々で質問責めにあったり、休んだ分を取り返そうと働いたため疲れたらしい。

雄介「……………すー…」

狼乾「……………寝るか」

気付いた時には既に寝息が聞こえ、狼乾も火を消し寝台に横になる。

……………しばらく横になっていたが何故か寝付けなかった。

窓を開けて何となく月を眺めるが胸がモヤモヤする。

理由は分かっている。

そこで暢気に寝てる馬鹿だ。

あまり思い出したくないが俺が幼い頃の話だ。俺は元々村の人間じゃ無かった。

大分記憶が薄れてきたが俺は赤ん坊の頃、ある盗賊団に拾われたらしい。

その時の盗賊団は余裕があったらしく、酔狂で俺を育ててくれた。

それから俺が成長し、盗賊として活動するようになり、ある村で強奪をした際にどこかの城から派遣された討伐隊に追われることになる。

仲間とは散り散りになり、受けた傷のせいで意識が消えかけた時、別の村――俺達の村にたどり着いた。

村の入り口で倒れていた俺は雄介の時と同じように玄豊さんに拾われた。

玄豊さんは子供とはいえ明らかに怪しい俺を受け入れてくれて、村で暮らせるように取り計らってもくれた。

当時から発言力の強かった玄豊さんの説得もあり、村の皆も俺を受け入れてくれた。

龍真と仲良くなったのもこの頃だ。

盗賊の世界しか知らなかった俺はよく玄豊さんに叱られた。

それでも村での暮らしは俺にとって新鮮で楽しかった。

それから十数年経ったくらいに雄介が玄豊さんに拾われた。

玄豊さんの紹介もあり俺も含めて村の全員が雄介を受け入れた。

そして雄介は俺と龍真とつるむようになった。

雄介は良い奴だ。

いつも笑顔で一生懸命で、村の仕事も真面目で、少しお人好し過ぎる所が不安だが。

話はそれだが雄介が村の生活に慣れた頃、俺はある不安に襲われていた。

優秀過ぎるんだ、コイツが……

村でも一番狩りが上手かった俺はその仕事が誇りだった。

しかし、雄介は俺と同じくらい、それ以上に狩りが上手かった。

身体能力は大差無い。

それでも見たことの無いような罠を作ったり、考え付かないような作戦を立てたり、雄介の成果は上がっていた。

俺の居場所を取られた様な気がした。

狩り以外でも、もしもの時の為に俺達は闘う訓練をしていた。

盗賊の時の経験もあり、この訓練でも俺は一番に立っていた。

しかし、ここでも雄介は俺を越えようとしていた。

妬ましかった。

憎かった。

羨ましかった。

先に行こうとする雄介が。

強者と並ぼとする雄介が。

狼乾「…………眠れねえ」

しばらく考え事をしていたが一向に眠られそうに無い。

俺は木で作った剣を持って外に出た。

狼乾「ふっ！はっ！」

木剣を振るう狼乾、既にその数は千を越えていた。

しばらくして木剣を降ろし汗を拭う。

狼乾「俺は…こんな気持ちでアイツの隣に居ていいのか……？」

狼乾は悩む、雄介の親友として今の心情でいいのかと。

狼乾「……………戻ろう」

流石にもう寝ないと明日がキツイので汗を流し、部屋に戻る。

狼乾（寝てる……か）

眠っている雄介を起こさないように静かに入る。

その際に何となしに雄介の顔を見て見る。

雄介「くー…」

やはり暢気な奴だ、と再度思う。

狼乾「……………答えを出すのは…また今度でいいか」

狼乾はそう呟くと布団に入る。

眠れなかったのが嘘の様に直ぐに眠りに落ちた狼乾

その日はいつもよりも良く眠れた。

第三十一話（前書き）

大分間が空いてすみません。

ついでに言うとなれなのですが一つお知らせがあります。

諸事情により小説に割ける時間をとることが難しくなりました。

そのためしばらくの間休載したいと思います。

順調に行けば二月には再開出来ると思いますので御了承ください。

第三十一話

雄介「……………」

曹操「……………」

雄介と曹操の間に沈黙が流れる。

しかし、気の重くなるようなものではない。

この日、雄介は曹操に呼ばれ、曹操の執務室を訪れていた。

おそらく今後の処遇についてだろうと予想していた雄介だが、執務室に入ると曹操は政務をしていて、「少し待て」と言われたので部屋の隅で仕事が終わるのを待っていた。

曹操「ふう………」

しばらくすると曹操は筆を置いて首を回す。

曹操「……………」

雄介「……………」

不意に目が合うと曹操は視線を外さず見つめて来るので雄介も見つめ返す。

曹操「……………気が利かないわね」

雄介「え？」

曹操「茶の用意でもしてくれたらよかったのに」

雄介「あ…………えっと…飲みますか？」

曹操「……………はあ、そうね…………庵で待っているわ」

竹簡を纏めて文官に渡しし、執務室を出て行く曹操

その背中を追うように雄介も出ていく。

雄介「どうぞ」

曹操「ありがとう」

執務室を出た後は厨房に戻り茶の用意と適当にお茶請けを持って庵を訪れた。

雄介「……………」

曹操「……そう硬くならず ゆっくりしなさい」

雄介「はあ……そう……言われましても……」

夏侯惇「……………何だ？」

雄介が視線をずらすと、そこには目を細め、剣に手をかけていつでも飛び掛かれるような体制で構える夏侯惇がいた。

どこから聞き付けたのか、曹操と雄介が話をすると聞き、飛んできたらしい。

曹操「春蘭もそう威嚇しないの」

夏侯惇「しかし……………」

曹操「春蘭」

夏侯惇「……………はっ」

曹操に諫められた夏侯惇は渋々といった様子で威嚇を緩める。

雄介「……………」

夏侯惇「……………」

曹操「……………さて」

多少の沈黙の後、曹操が口を開いた。

曹操「五代、審議の結果、今後お前は……」

雄介「……………」

じつと次の言葉を待つ。

曹操「……特に指示は無いわ、これまで通りに仕事をしてちょうだい」

雄介「……………へ？」

曹操の言葉に間拔けな声を出す雄介、クウガの力を知れば何かしらの難題を押し付けられるか、最悪追放、または処刑もあり得るかと考えたからである。

曹操「何？不満かしら」

雄介「い…いえ、何を言われるのかと色々と考えていたので……」

曹操「そうね、私も色んな案を考えたわ……で、出した結論はお前に軍事は向いていない、いえ、絶対的に合わない」と

曹操は今日まで雄介について隠密に調べさせていた。

そしてその調査で分かったのは雄介は優しすぎるということ。

人の上に立つ者には確かに優しさも必要だ。

しかし、軍において優しすぎる雄介は非常に危うい存在になり得る。

故にクウガの力の軍事利用は難しいと。

曹操「まあ、有事の際には遊撃手として働いてもらうわ」

雄介「……………はい」

結局力を求められるのかと雄介は肩を落とす。

その後「下がってもいい」と言われたので厨房に戻ろうとしたのだが……………

雄介「……………何でまた」

夏侯惇「どうした？ さっさと構えろ」

流石に嫌悪感を表情に現す雄介

対し気にしていない様子の夏侯惇

二人はいつかの様に訓練用の剣を持って対峙していた。

あの後下がろとした雄介、しかし夏侯惇に呼び止められる。

夏侯惇「待て」

雄介「何ですか？」

夏侯惇「私と闘え」

雄介「……え？」

間抜けな声を出す雄介、またいつかの様に有無を言わせず引っ張って行く夏侯惇

曹操「……はあ」

曹操は仕方ないといった様子で二人の後に付いて行く。

雄介「何故……闘わなければいけないのですか？」

夏侯惇「あの時、お前はそれほどの力を持っておきながら闘う事を放棄した、私は今非常に腹が立っている！」

夏侯惇が言いたいのは雄介と夏侯惇が手合わせをした時の事である。

夏侯惇は雄介がクウガの力を持っているのに闘おうとしなかった事を武人である自分への侮辱と捉えたらしい。

そしてクウガの力が発覚した今、雄介に再戦を挑んだのだ。

雄介「……………」

夏侯惇「さあ！お前の力を見せてみる！！」

正直此処から逃げ出したい雄介、しかし目の前の夏侯惇と離れて様子を見ている曹操の視線がそれを許さない。

夏侯惇「まだかっ！」

反応しない雄介にそろそろ苛立ってきた夏侯惇

そんな二人を見かねて雄介に曹操が声をかける。

曹操「五代」

雄介「……はい」

曹操「上に立つ者には確かに仁徳が備わっていなければならないわ」

雄介「……………」

曹操「でも時には霸道も必要になる、貴方には分かるはず」

雄介も分かっている、優しさだけではいけないと。

しかし雄介に力を振りかざす様な真似は出来ない、したくもない。

だが今回だけは少しだけ考えを変えてみる。

雄介「分かりました」

そう言うのと剣を地面に刺し、アークルを出現させる。

雄介「……………変身！」

次の瞬間には雄介の姿はクウガに変わった。

夏侯惇「やっとやる気になったか！行くぞ！」

雄介がクウガに変身し、戦意があると捉えた夏侯惇は嬉しそうに笑う。

夏侯惇「はぁ！」

夏侯惇は未知なる相手を目の当たりにし、一撃必殺でしとめようとする。

しかし……………

クウガ「超変身」

夏侯惇「なっ！？」

クウガTF「……………」

クウガはクウガタイタンフォームに超変身し、夏侯惇の攻撃を受ける。

夏侯惇「くっ！」

クウガTFの堅さに夏侯惇の手は痺れる。

夏侯惇は一旦距離を取り、クウガTFを見据える。

夏侯惇「鎧の色が変わった……聞いているぞ、その鎧は張飛の一撃も通さないと」

クウガTF「……………」

夏侯惇「ふん、澄ましていられるのも今の内だ！」

クウガの力を実感したためか血が騒ぐ夏侯惇、気合いを入れ直し再びクウガTFに斬りかかる。

クウガTF「……………」

夏侯惇「はぁ…はぁ…」

二人の交戦は一刻と続いていた。

実際は夏侯惇が一方的に攻撃し、クウガTFがただ耐えるだけなのだが

夏侯惇「何故…反撃しない！」

クウガTF「……………」

既にこの問答は何度も繰り返されている。
しかしクウガTFは答えようとはしない。

夏侯惇「くっ！……………はああああ！」

夏侯惇は苛立ちをぶつける様に剣を降り下ろす。

しかし次の瞬間……………

夏侯惇「なっ！？」

曹操「っ！？」

「ガギン！」と言う音と共に剣が刀身の半ばで折れてしまった。

夏侯惇「屈辱だ……………！」

夏侯惇は折れた剣を投げ捨てる。

そして何を思ったか素手でクウガTFに殴りかかろうとした。

しかしクウガTFはその拳を手で受け止める。

夏侯惇「っ！」

クウガTF「俺は……」

ずっと黙っていたクウガTF、突然口を開く。

クウガTF「俺はこの力で誰も傷つけない」

夏侯惇「何を……？」

曹操「……………」

そこでクウガTFは変身を解く。

雄介「俺は大切な人を守りたいからこの力を手に入れた、傷つける為じゃない……」

曹操「……守るために、自分が傷ついても構わないと言うの？」

先ほどの鬨いと雄介の言葉を聞いて曹操が尋ねる。

雄介「誰かが悲しむくらいならそれでもいい……俺は耐え続ける」

曹操「貴方が傷ついて悲しむ者はいないの？」

雄介「いる……だから俺は負けない」

曹操「……理解しかねるわ」

雄介「……………」

曹操「守るのであれば全てを守りなさい、守りたい者も、己自信も」

雄介「曹操……様」

曹操「華琳よ、真名を呼ぶ事を許可するわ」

雄介「……はい！」

華琳「……私は戻るわ、話はちゃんとつけておきなさい」

華琳は夏侯惇を見るとそのまま去って行った。

雄介「……夏侯惇様」

夏侯惇「私は…私はお前の考えが理解出来ない」

雄介「……………」

夏侯惇「春蘭だ、貴様の強さを認め、真名を預ける……しかし！い

つか貴様を倒してみせる！絶対にだ！！」

そう言うと春蘭もこの場を去って行った。

残された雄介は改めて決意する。

大切な人達を守ると。

第三十二話（前書き）

休載とか言っときながら書けたので載せますね

第三十二話

日も沈み月が昇った頃

「はっはっはっ！今日も上手くいったなっ♪」

「そうっすねー、中々の上物だから結構な値になりますよ！」

どこかの山小屋に二人の男―山賊がいた。

山賊1「確かに上物だな」

嫌な笑みを浮かべる二人の山賊は同じ所に顔を向ける。

「……………」

その視線の先には猿ぐつわを付けられ、手足を縛られた妙齡の女がいた。

縛られた手足は赤く腫れていて、抵抗はしたようだが今はぐったりとして目には精気が無い。

女はこの二人の山賊にさらわれたのだ。

二人の山賊は主に人身売買を生業としていた。

人をさらっては奴隷商に売り渡す。

今日も女をさらい、一仕事終えたと打ち上げていたのだ。

山賊2「味見したいところすけど出来るだけ高く売りたいですしね」

山賊1「今度適当にさらえばいいだろう」

奴隷商に足元を見られるのを避けるため手を出すのは控える。

女「……………」

山賊1「さて、飲みなおそうぜ」

山賊1は打ち上げ用に用意していた酒を盃にそそぐ。

その時だった

コンコン

と、小屋の扉が叩かれる。

「「!?!」」

山賊は突然の音に驚き身構える。

二人は剣を抜き女を隠してから扉に近づく。

山賊1 「……………」

山賊2 「……………」 コクッ

バツ!

二人は目配せをして扉を開ける。

「「っ!?!」」

なんで私はここにいるの？

いつもなら友達と行く山菜取り、たまたま、そうたまたま今日は一人で来ただけなのに………

隣の村で人さらいがあったのも知っていた。

欲張り過ぎてあまり森の奥まで行ってはいけないのも言われていた。

言い付けを破ったから？

だからかな？

だからこいつらに捕まって、売られちゃうのかな？

？

なんだろう

誰かが扉を叩いてる？

こいつらの仲間？

そう思っていると隣の部屋に移された。

一人？

入口の方をしてみる。

誰？

「もう……大丈夫」

暖かい

そう思えるような優しい声

なんだかホッとして……目の前が……

――

華琳「……………」

雄介「……………」

目を細め、沈黙する華琳

正座する雄介

もう何度目かになるこの構図

雄介は非常にばつが悪そうだ。

華琳「はぁ……………言い分は？」

華琳は呆れたように尋ねる。

雄介「……………ありません」

華琳「山賊捕獲、それによる奴隷商の解体、確かに功績は挙げているわ……………無許可でね」

雄介「うつ……………」

華琳の言葉に頭が上がらない雄介

話は数日前にさかのぼる。

雄介「人さらい？」

狼乾「ああ、ある地域で少し前から何人がいなくなっているんだ、最初は失踪かと思われたんだが立て続けに起こってな……失踪じゃなくて人さらいってことになって、討伐隊が……って雄介？」

そこまで話した所で雄介の姿は消えていた。

嫌な予感がした狼乾は城中を探し回ったが雄介はどこにもいなかった。

何故なら既に雄介は街を出ていたからだ。

狼乾から話を聞いた雄介、人を守るために闘う雄介が人さらいの話を聞いてじっとしてられる訳も無く、自分でも気づかない内にその身体は動いていた。

人伝に人さらいが起きている地域にやって来た雄介はまずクウガペガサスフォームに変身する。

クウガP Fの超感覚を駆使して人さらい犯を探す。

しかし、そうすぐには見つからず、加えてクウガP Fは50秒以上は使えず、連続使用も難しいので中々戸惑っていた。

そうして辺りも暗くなった頃、山賊の会話を捉える。

場所を特定したクウガはクウガドラゴンフォームに超変身し、全速

力で向かう。

小屋に到着するとクウガマイティフォームに超変身し、中の様子を伺い、山賊を扉に引き寄せて相手が出てきた所を捕縛し、紐があったのを見つけそれで縛っておいた。

そうして被害者の女を探す。

その際には念のために変身を解いておいた。

雄介「……いた」

女を見つけると怖がらせないように声をかける。

雄介「もう……大丈夫」

女はそれで緊張が解れたのか意識が落ちた。

その後は女を抱えて近くの村に向かった。

着いた村は女の村らしく、女がいなくなったことで騒ぎになっていた。

その上山賊の討伐隊―李典も来ていてそこに雄介が女を連れて来たので一層騒ぎが大きくなった。

雄介は李典に詳細を話し女を家族に預ける。

李典も雄介の力を理解しているので信用してくれた。

それから雄介と共に小屋に向かい山賊を連行する。

その夜は村に滞在し、次の日に街に撤収した。

華琳「無断でいなくなつて……脱走としてももう少しで貴方の討伐隊を出しそうになつたわ」

雄介「うう……」

華琳「働いてくれるのは構わないわ、しかし！事前に相談！打ち合わせ！指示！これをちゃんとするこゝと！真桜と兵士に無断な仕事をさせてしまったし要らない混乱を招いた事を理解しなさい！」

雄介「はっ……はい！」

華琳「……それと、件の村から礼状が届いたわ、被害に合つた娘が貴方に礼を伝えてくれと、その娘、元気になつたそうよ」

雄介「そうですか……よかつた」

華琳「礼状は後で届けさせるから仕事に戻りなさい」

雄介「はい、失礼します」

華琳「……………もっと単純かと思ったけど……………案外面倒ね」

雄介が出ていった後、静かにぼやく華琳、その顔は面白い物を見つけたかの様に笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764u/>

仮面ライダークウガ×真・恋姫無双 異世界への冒険

2011年11月17日18時48分発行